

放送人の会

No.88

2020.6.27

改訂・7.20

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.jp

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、菅野高至 (HP担当)、鈴木典之、

コロナ禍のその先へ

放送人の会

会長 今野 勉

1 総会・放送人グランプリ贈賞式ができなかった

2019年度の最初の会報巻頭言で、私は「本年の活動のキーワードは「参加」である」として、次のように、会員の皆さんに呼びかけた。

放送人グランプリは、会員の推薦(という参加)から始まる。会員の参加は、贈賞式で受賞者に拍手し声をかけることで終わるーと思うがどうだろうか。

○内は、前後の文章が無くて舌足らずになるのを避けるために、今回、私が付言した字句である。

この呼びかけが少しは功を奏したのか、2019年の総会・放送人グランプリ贈賞式には、かなりの数の会員の姿があった、嬉しかった。

ことしも呼びかけて、さらに会員の皆さんの参加を、と思っていた矢先のコロナ禍である。総会も贈賞式も中止となった。

さまざまの会合や催事が中止や延期になり、その中の幾つかは、オンライン会議で代行されている。確かに、何事かを決めるだけなら、オンライン会議でも済むし、その方が便利だ、ということも解った。

しかし、放送人の会の総会や放送人グランプリの贈賞式は、報告を受けたり、何かを決めることに意味があるのではない。そのことを、中止になってみて、私は、心底、実感したのである。

放送人の会の会員は、長い間、放送に携わってきた者の集まりである。それは「同志」の集まりなのだ、と今更のように気づかされる。そして、贈賞式の受賞者は後輩の同志なのである。放送について考える、というその一点で同志である者が、会って互いに声をかけ合い、話し合う機会を持つこと、そのことの意味を私は今回、今更のように、痛感した。

その上で、残された今期の間に、何をすべきか、を考えた。もちろん、コロナ禍の行方はまだ解らないことを承知の上である。

2、集まれる、としたら、何をすべきか

放送人の会の創立当初、コンテンツポラリー・シンポジウムとして、現在起きつつある社会的・政治的課題に対応するシンポジウムを開いたことがある。北朝鮮による拉致問題をいち早くテーマにしたシンポジウムもそのひとつであった。

今なら誰の頭にも、新型コロナ・ウイルス感染症についての放送、報道をテーマにして、というアイデアが浮かぶはず

だ、それもよし。

私の胸には、リアリティ番組の出演者の自殺問題がくすぶっている。もちろん、「テラスハウス」なる番組でプロレスラーの女性が自殺したという事件も衝撃であったが、私は、一連の報道の中で、「アメリカでの2004年から今までの16年間に放送されたリアリティ番組に出演した人のうち、少なくとも21人が自殺した」という報道には、衝撃を通りこして心臓が凍りついた。21人も死んでいるのに、その事実を、新聞も週刊誌もネットも、そして肝心のテレビ自身が、これまでひと言も報じたことがない、ということに、私の心は凍りついたのだ。果たして我々には情報化社会にいるのか。そもそも「情報化社会」とは何なんだ！

3、そして、コロナ禍のその先を目指して世代交代の準備を進めよう

コンテンツポラリー・シンポジウムはどうなるか解らない。しかし、確実に出来ること、やらなければならないことは、ある。

一番の課題は、世代交代である。3月28日に堀川とんこうさんが死去、4月27日、大原れいこさん死去、83歳と84歳。堀川さんは私より1歳下、大原さんは同年、二人とも放送人の会の会員である。私たちの世代は、本気になって、放送人の会の会員の世代交代を目指すなければならない。会員ひとりひとりの皆さんの協力を願う次第である。

放送人グランプリ2020

(敬称略)

(第19回)の決定

2002年に創設いたしました放送人が選ぶ・放送人の賞「放送人グランプリ」も、今年で19回目を迎えました。

「放送人グランプリ2020」の選考委員会は、コロナ感染症予防のため、4月初め、書類選考により行われ、下記のとおり、今年の各賞が決定しました。

選考委員は招待委員の松山珠美（放送批評家、当会委員（50音順）の佐々木彰（元TX）、新山賢治（元NHK、菅野高至（元NHK）、逸見京子（オフィスヘンミ）、三原治（放送作家、矢島良彰（テムジン）、吉田賢策（元テレビ朝日）、選考委員長の西村与志木（元NHK）でした。

また2015年度に新設の「大山勝美賞」も今年の受賞者が決定しました。

「大山勝美賞」は当会の創立以来活躍され、代表幹事もつとめられた故大山勝美を記念する賞です。ドラマの若手・中堅の演出家、制作者に贈られます。

選考委員（50音順）は招待委員の五十嵐文郎（テレビ朝日）、当会委員（50音順）の石橋冠（演出家、鈴木嘉一氏（評論家、鶴橋康夫（映画監督、西村与志木（元NHK）、選考委員長は八木康夫（元TBS）です。書類選考で、4月下旬に行われました。

表彰式はコロナ禍のため、今回は中止しました。賞状、トロフィー、大山賞の賞金は、トロフィーの完成を待って、お送りします。

（七月下旬以降の予定）

選考委員の講評、受賞者の言葉はこの会報でい覧ください。

■グランプリ

「フジテレビヤングシナリオ大賞」

フジテレビ

1987年以来、毎年多くの有望な脚本家を生み出した、その見識と育成の功績に対して。

■準グランプリ

「武器ではなく命の水を」 医師・中村哲とアフガニスタン」
NHK ETV特集班 日本電波ニュース社

12月4日、中村医師が凶弾に倒れた。砂漠に水を引き、緑の大地を育てた軌跡を長期に渡り取材したこと、さらに計報に接し、2016年のETV特集を急遽、再放送したことに対して。

■優秀賞 1

「全貌 一一・二六事件」最高機密文書で迫る」

NHK

一つの「文書」で、国家の存亡危機に落ちることを描いた秀作ドキュメントであり、今の日本に通じる課題を提起したことに対して。

■優秀賞 2

「女優たちの終わらない夏・終われない夏」

NHK・かわうそ商会・NED 女優たちが手弁当で34年間続けてきた、戦争手記の公演が19年の夏に終止符を打つ、平均年齢80歳の旅公演の日々を追う、秀逸な作品に対して。

■優秀賞 3

「文化放送報道スペシャル 戦争はあった」
文化放送

アメリカ生まれの詩人・アーサー・ナードが、首都圏各地に隠れる「戦争の痕跡」をめぐり、それぞれの謎を解き明かしてゆく、秀作ドキュメントに対して。

■企画賞

「プレバト!!!」
MBS

「俳句や水彩画、生け花」などを、辛口で査定しランキングするバラエティ番組に仕上げた、その卓越した企画力、演出力が、放送文化のさらなる多様性を開発したことに対して。

■特別賞

杉田成道 （演出家）
フジテレビの名作「北の国から」の演

出・杉田成道は、2020年1月〜2月に、仲代達矢主演の時代劇「帰郷」を、映画とテレビで発表。「老いてますます」の演出家に、特別賞を贈ります。

■特別功労賞

堀川とんこう（演出家）

「岸辺のアルバム」「モモ子シリーズ」など素晴らしい作品群を残された、堀川とんこうさんを称え、「放送人の会」に大きな貢献をされたことを謝し、ここに特別功労賞を贈りたいと思います。

『第6回大山勝美賞』

★ 中込卓也

テレビ朝日 プロデューサー
民放初とも言える長時間かつ長期間のドラマ、「やすらぎの郷」と「やすらぎの刻」道」を、見事に運営したプロデューサーとして、その努力と能力を高く評価します。

★ 藤村忠寿

北海道テレビ ディレクター

「水曜どうでしょう」で異例のヒットを飛ばした氏は、ドラマの演出にも手腕を発揮し、昨年の「チャンネルはそのまま！」では日本民間放送連盟賞のグランプリを受賞、氏の功績を高く評価したい。

放送人グランプリ選考経過

選考委員長 西村与志木

今年の放送人グランプリの選考は19回目となりますが、かつてない形となりました。選考委員会は三月三十日に千代田放送会会館で開かれることになっていたのですが、折しも新型コロナウイルスの感染拡大があり、選考は各委員との郵送によるやり取りで決定することとなりました。

今年度は中止とも考えたのですが、今野勉会長の「どんなことがあっても中止にすべきではない。中止にすると二〇一九年度の人と作品が欠番になってしまう。それでは選ばれる人にも選ぶ人にも失礼である」という一言で実施を決めました。

選考委員も今年は十人のうち五人が入れ替わって新たに参加するという状況でしたが、いつもは喧々諤々の議論が展開される選考委員会もなく、戸惑われたのではないのでしょうか。

しかし例年通りおこなわれた一月の下馬評座談会、そしてそれをまとめた二月の会報と推薦投票用紙が全会員に送られ、四十通を超える推薦投票がありました。これらの推薦投票を各選考委員宅に郵送で送り、各賞の選定をお願いしました。

選考委員長のもとに送られてきた手紙は、それぞれの選考委員の「熱」がダイレクトに伝わってくるもので感動いたしました。委員長が諸意見をまとめて、グランプリ他各賞を決め、また郵送で各委員の了解をいただくという形にして結論を得ました。

グランプリに選ばれた「フジテレビヤングシナリオ大賞」はコンクールがコンクールに贈賞するという、ユニークなものとなりました。

受賞の内諾を兼ねて連絡すると驚きとともに非常に喜ばれていました。また二〇二三年以来久々に特別功労賞を決めました。

堀川とんこうさんです。とんこうさんはTBSで名ディレクターとして、その後フリーの演出家として名をはせましたが、放送人グランプリの審査委員長としても大変な尽力されました。

とんこうさんの番組を見る温かくも厳しい視線を今も感じます。ありがとございませう。

表彰状 放送人グランプリ

フジテレビヤングシナリオ大賞 殿

フジテレビヤングシナリオ大賞は1987年以来31回の本年まで、実力ある脚本家を輩出してきました。とりわけ昨年は、第15回受賞の安達奈緒子さんが「きのう何食べた」

「サギデカ」「G線上のあなたと私」の3作品において、絶妙な白詞とストーリー展開で個性を発揮しました。また、第22回受賞の野木亜紀子さんは向田邦子賞を受賞し、第16回受賞の金子茂樹さんも本年同じく向田

邦子賞を受賞しました。多くの有望な作家を世に出し続けているその見識と、その後の育成の功績を讃え、ここに放送人グランプリを贈ります。

二〇二〇年七月五日

一般社団法人 放送人の会

会長 今野勉

大山勝美賞選考経過

選考委員長 八木康夫

今回のコロナ禍のなか、選考委員が一同に会することが困難であると判断して、「放送人グランプリ」に準じて、各選考委員書面での持ち回り審査となりました。

まず各選考委員に書面で候補者を挙げて頂き、それをまとめて選考委員長（僕）の判断で大山賞候補者を内定し、各選考委員にフィードバックし、お電話で直接、意見を伺い、それをふまえて決定と至りました。

大山賞は原則プロデューサー、ディレクター各一人ずつですが、今回各委員から候補者としてプロデューサー4人、ディレクター2人のお名前が挙がりました。そして上記のプロセスを経て、テレビ朝日の中込卓也プロデューサー、北海道テレビ放送の藤村忠孝ディレクターが、今回の大山勝美賞の受賞者となりました。

中込氏は準備期間を含めれば4年間、帯ドラマ「やすらぎの郷」、「やすらぎの刻の道」を制作、現在の民放では画期的な偉業を成し遂げられました。これもひとえに脚本・倉本聰氏とベテランスター俳優たちの氏への信頼の賜物です。氏の労を多として贈賞に至りました。

藤村氏はかつて地方局としては初めてと言っている、バラエティ番組「水曜どうでしょう」を大ヒットさせました。近年は「ミエルヒ」などテレビドラマの演出も手懸けられ、昨年制作された「チャンネルはそのまま!」はそのテーマ性、手法、エンターテインメント性が高く評価され、民放連賞グランプリを受賞しました。氏の功績を高く評価し贈賞に至りました。

放送人グランプリ2020

贈賞作品リスト

◆グランプリ◆

フジテレビヤングシナリオ大賞



〈表彰理由〉

1987年第1回受賞の坂元裕一さん以来、31回の本年まで絶えることなく、数多くの実力ある人気脚本家を輩出しました。とりわけ、昨年は第15回受賞の安達奈緒子さんが、「きのう何食べた」（テレビ東京・「サギデカ」（NHK）・「G線上のあな

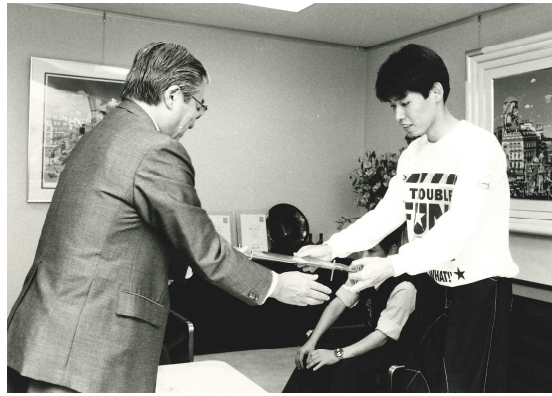
たと私」(TBS)の色合いの異なる3作品で、絶妙なセリフとストーリー展開で個性を発揮しました。

また、第22回受賞の野木亜紀子さんは昨年、第37回向田邦子賞を受賞し、第16回受賞の金子茂樹さんは、本年4月に第38回向田邦子賞を受賞しました。連続の向田賞でした。

毎年多くの有望な作家たちを生み出した、その見識と、その後の育成の功績を讃えて、グランプリに推奨します。

(講師担当・佐々木彰)

第1回受賞者・坂元裕二氏



【受賞者の言葉】

フジテレビ 編成制作局第一制作室長

牧野 正

この度は「放送人グランプリ2020」のグランプリに選出いただき誠にありがとうございます。「フジテレビ ヤングシナリオ大賞」という取り組みを評価していただき大変感謝申し上げます。

「ヤングシナリオ大賞」は、作品を選んで終わりではなく、一緒に作り、キャリアを積み重ね、脚本家として一本立ちできるようにサポートする。そして、その結果我々のソフト力も増す、ということを目指し取り組んでまいりました。

実際に「ヤングシナリオ大賞」からたくさん脚本家の方が輩出され、数々のヒットドラマが生まれています。また多くの方が多方面で活躍されていることも評価していただいた点かと思えます。才能豊かな人材を発掘するために、これからもこの取り組みを続けていきたいと思っております。

第31回受賞者・中村允俊氏



【受賞者の言葉】

フジテレビ 第一制作室

エグゼクティブディレクター

河毛 俊作

「ヤングシナリオ大賞」が創設された1987年、僕は35歳だった。あの頃の僕たちは、若く、何者でもなかった。ただ、既存のドラマとは全く違う新しいドラマを作りたいという情熱だけを有り余る程に持った小さな革

命軍だった。

言うまでもなくドラマ作りで最も重要なものはシナリオである。僕たちが「ヤンシナ」を始めた目的は、「ドラマ界に革命を起こす」という夢に向かって、共に戦ってくれる「仲間」が欲しいという切実な思いからだっ

た。最初の革命戦士は、当時19歳の坂元裕二君だった。

それから33年間という歳月の中で、「ヤンシナ」は多くの優れた作家を輩出し、日本のドラマ界に貢献できたのではないかと、創設にかかわった者の一人として自負している。

時は流れ、ドラマを取り巻く環境は大きく変わった。しかし、ドラマ作りで一番重要なのは「良いシナリオを作ること」であるのは、今も、これからも、変わらない。

◆準グランプリ◆

ETV特集「武器ではなく、命の水を（医師・中村哲とアフガニスタン）」を制作した日本電波ニュース社と、急遽再放送したNHKETV特集班

○表彰状

日本電波ニュース社は、20年以上にわたって、厳しい条件のアフガンにおいて医師中村哲氏の活動取材し、世に伝えてきました。

また中村医師の用水路建設を詳細に記録した映像は、アフガンの人々の教科書として大きな意味を持つことになりました。

番組は、中村医師が銃撃により急逝した直後、二〇一六年のETV特集を数回にわたって再放送したものです。

中村医師の志を余すところなく伝えた日本電波ニュース社の仕事を高く評価し、また急遽再放送したNHKETV特集班の時代感覚を讃えて、ここに準グランプリを贈ります。

(表彰理由)

日本電波ニュース社は1998年、パキスタン・アフガン国境山岳地帯で巡回診療をする中村哲医師に密着取材したのを皮切りに、



アフガンの中村医師の活動を継続取材してきました。その撮影時間は1000時間にも及び、それらは番組としてせき止められ、強い意志で現場で苦闘する・中村医師の存在を世に伝えてきました。

中村医師は、ここ10年用水路建設に情熱を捧げてきましたが、取材班は本人に密着すると共に、用水路がどのように作られるかを、技術的側面から詳細に記録しました。昨年末、中村氏が急逝した後に、この記録はアフガンの人々の教科書として大きな意味を持つことになりました。

日本が誇る偉人・中村医師の志を、後世にしっかりと残すことを成し遂げた日本電波ニュース社・谷津賢二カメラマンや制作スタッフの仕事が高く評価します。

番組は12月4日中村医師が銃撃で亡くな

つた直後の7日に、2016年9月放送のE TV特集を再放送したもので、年内に総合波を含め2回再放送して、2月には2001年当時の映像を「この時代の放送」で、他、ニュース枠等でも放送されました。

追悼と共に遺志を継ぐ活動も広がりを見せています。日本電波ニュース社のアフガン取材は今も続いています。

【受賞者の言葉】

(講評担当・吉田賢策)



谷津賢二氏(左)と中村哲医師(右)

日本電波ニュース社

谷津 賢二

「放送人グランプリ2020」において、私たちの番組に準グランプリを授けて下さったことを制作者一同、本当に嬉しく思っています。代表して御礼を申し上げます。ありがとうございます。

番組はNHKの東野真さんが中村医師の実践と思索を深く、そして真摯に受け止めてくださり、制作が実現しました。

ただ、この番組は優れた撮影技術や、革新的な編集技術があるわけでも無く、息を飲むようなドキュメントも有りません。素直な映像記録でしかないと思っています。しかし、それでも評価をいただいたのは、何よりも中村医師の生き様が多くの方々の心に響い

たからこそ思っています。中村医師は自らの良心に従い、他の人のために生きた利他の人でした。怪しげな為政者、利に聡い経済人が幅をきかせる世の中で、中村医師の深い思索、信ずるに足る言葉が多くの人々を励まし続けるのだと思います。

昨年の12月4日、私は中村医師急逝の報に衝撃を受け、世界が歪むような感覚に襲われました。それでも、こんなことを考えました。「誰が命を奪ったのか？」私は犯人捜しをしたかった訳ではありません。アフガンで戦争が絶えないと知っていても、遠い国のことだという無関心、貧困や差別に苦しみ尊厳を奪われた人々から目をそらしてきたこと、干ばつなどの気候変動と真摯に向き合わない私たち自身が中村医師の命を奪ったのではないかと、戦慄を覚えたのです。世界がアフガニスタンのことを真剣に考え、本当に必要な支援があれば、治安は回復していたかもしれない。そうであれば中村医師は命を奪われることは、無かったのではないかと。

多くの問題と真摯に向かいあい、重い荷物を一人で背負い続けたのが中村医師だったのかも知れません。しかし『暴を以て暴に報いるのは我々のやり方ではない』という中村医師の信念を頼りに、慎重しくともみなが幸せに暮らせるように、世界が少しでも変わることでしか中村医師の命に報いることは出来ないと思っています。こんな事を心にとどめながら、これからも中村医師のことを伝えていきたいと思っています。

【受賞者の言葉】

NHK ETV特集

東野 真

ETV特集では、中村医師の活動をこれまでも何度かとりあげてきました。今回の番組は、長年の取材を大成したいという谷津さ

んの思いを受けて2016年に放送したものです。まさか追悼番組として再放送されることになるうとは思いませんでしたが、視聴者からは3年前をはるかにしのぐ大きな反響がありました。国際放送で英語版も再放送しましたが、Facebookのページには海外から12万件もの「いいね」と2300件にのぼるコメントが寄せられています。

昨年暮れ、私たちは世界の尊敬を集める2人の日本人をたて続けに失いました。1人は元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんであり、もう1人が中村医師です。その緒方さんの死に際して中村医師が追悼文を書かれていたことを先日始めて知りました(ペシヤワール会報No.18)。

銃撃される1か月ほど前の文章です。「緒方貞子さんは最も親近感を覚えてきた大先輩の一人です。……用水路が要所を開通したときは必ず祝電が届き、職を退かれたのちもその後の様子を気にかけておられました。……温かい大きな火が消えた気がしています」。

ETV特集では今年1月に緒方さんの追悼番組も制作・放送したのですが、2人の間にあったこの強い絆のことをうかつにもわれわれは知りませんでした。「温かい大きな火が消えた」という言葉に中村医師自身のこと、重なり、読みながらこみ上げるものがありました。ETV特集はこれからも「本物」を見つめる番組であり続けたいと思っています。今回はありがとうございました。

◆優秀賞 1◆

NHKスペシャル「全貌 二・二六事件」最高機密文書で迫る

○表彰状

近代日本最大の軍事クーデター「二・二六事件」。その全貌が戦後74年を経て、この番組

で明らかになりました。クーデター決行前から、海軍はそれを察知していました。もしその事実が当時明らかになっていれば、歴史はどうなっていたか。現実にはこの事件を機に、陸軍の力が拡大し、日本は無謀な太平洋戦争に突入していったのです。

一つの文書で国家存亡の危機に陥ることを描き、現代政治に於ける「文書」の意味や、管理保存の在り方をも問ひかける優れたドキュメンタリーとして、ここに優秀賞を贈ります。



〈表彰理由〉

近代日本最大の軍事クーデター「二・二六事件」。その全貌が戦後74年を経て、この番組で明らかになった。事件が起こる前から、海軍はそれを察知していたという。もしその事

実が、当時明らかになっていれば……。この事件を機に陸軍の力が拡大し、日本は無謀な太平洋戦争に突入していった。

一つの「文書」で、国家存亡の危機に陥ることを描いた秀作ドキュメントだ。

今の日本に通じるものを感じざるをえない。

(講評担当・八木康夫)

前列左より、宮原修平・記者、板橋孝太郎・リサーチャー。



後列左より、山口健・記者、松本卓臣・制作統括、小野さおり・音響効果、神津善之・D、右田千代・D、高橋寛二・編集、佐々倉大・ドキュメントパートの撮影、益田雅也・ドキュメントパートの照明音声。

【受賞者の言葉】

NHKスペシャル

「全貌 二・二六事件」

制作スタッフ一同

この度は、「放送人の会」グランプリ優秀賞をいただき、本当に有り難うございました。

放送の歴史を刻んできた大先輩方から、このような栄誉ある賞をいただき、スタッフ一同心より御礼を申し上げます。

私たちが取り組んだ「全貌 二・二六事件」

は、今から80年以上前に企てられた軍事クーデターを扱った番組でした。専門家が「第一級資料」とする最高機密文書を発掘したことで取材は動き始めましたが、当事者の多くが鬼籍に入り、現場もほとんどが残っていないという現実がありました。しかし、五千ページを超える極秘文書には、事件の全貌とともに、わずか9年後に日本を壊滅に追い込んだ太平洋戦争につながる組織の問題点が記されていました。私たちは、この番組を「終戦の日」に放送することの意味を痛感しました。

過去の歴史ではなく現代のこととして、若い世代にも伝えたいと取材に臨み、新たな表現に挑戦しました。極秘文書からの新事実の抽出とその朗読・100歳を超える当事者の証言・事実と忠実に再現したドラマ・綿密な取材に基づくCGの四者を融合し、事件当時と現代をつなぎました。「歴史の真の姿を知り、未来への教訓としたい」という制作チームの思いは視聴者に届き、若い世代にも多く見られとても有り難く思いました。

大きな危機に直面した時、国家は、組織は、社会のリーダーは、どうふるまうべきなのか。国民ひとりひとりには、どうすることができたのか。

公文書として記録されながら、長く秘匿されてきた今回の文書の存在は、様々なことを私たちに語りかけてきます。組織を守るためには、重要な事実が隠されることがある。私たち国民・市民が知らされない、重要な事実がある。歴史が教えるこの現実を知った上で、私たちはどう危機に向かっていくべきなのか。今なお、考えさせられています。その答えをまた

番組で提示していきたいと、スタッフ一同願っています。

どうも有り難うございました。

(右) 堀切園健太郎・ドラマパート演出



(左) 板橋孝太郎・リサーチャー。

◆優秀賞 2◆

BS1スペシャル「女優たちの終わらない夏・終われない夏」

〇表彰状

広島・長崎の惨禍を伝える朗読劇が二〇一九年の夏、34年の歴史に幕を下ろしました。渡辺美佐子さんから第一線の女優たちは全国を巡り、各地の子供たちとともに、被爆者の手記を読み継いできました。二〇〇七年からは上演母体が解散し、自ら手弁当で運営も担ってきました。番組は、平均年齢80歳以上、最後の夏を迎える女優たち、10人の日々を追います。

戦争・国家・人生・役者など、深い思いを静かに伝える秀作を讀んで、ここに優秀賞を贈ります。

〈表彰理由〉

第2次世界大戦で被災した子供たちの手記を、戦中・戦後初期生まれの女優たちが手弁

当で、朗読する巡回公演が、2019年の夏、34年の歴史に幕を下ろした。

戦後40年の1985年夏、文集「夏の雲は忘れない ヒロシマ・ナガサキ1945」

年」ほか、様々な文集や手記をもとに、朗読劇「この子たちの夏」が初めて上演され、以後、毎年開催して来たが、上演母体の解散に伴い、2008年に渡辺美佐子、高田敏江、大原ますみ、など有志が「夏の雲」を結成し、新しい台本「夏の雲は忘れない」をつくり、毎年夏に全国で巡回公演を続けて来た。参加女優の高齢化もあって、公演は終止符を打った。



番組では、平均年齢80歳以上の女優たちの、最後の夏の日々に寄り添う。

各公演では、10人のメンバーから交代で6人が、地元有志と一緒に出演する。リハールと公演を通して、舞台に立つ若い人や応援の地元の人々に、幼い友や家族を失う・戦争の惨禍を託して行く。

最後の女優たちは、大橋芳枝、大原ますみ、長内美那子、川口敦子、高田敏江、寺田路恵、日色ともゑ、柳川慶子、山口果林、渡辺美佐子（50音順）。

戦争・国家・人生・役者など、深い思いを静かに伝える秀作を讀みたい。

(講評担当・菅野高至)

【受賞者の言葉】

かわうそ商会 代表取締役

正岡 裕之



「私たちはただの代読なんです」という言葉を耳にした時、この現場にいられて本当に良かったと思っ



百戦錬磨のベテラン女優をして、決して慣れることのない、いや、慣れてはいけないと言わせる。言葉の重さ。それは原爆で死んでいった子どもたちの最後の声であり、子をなくした母の心の叫びだった。それを、無心になって朗読する。何十年にも渡って手弁当で続けてきた女優たちの心の強さ、しなやかさに感服しながら、何が彼女たちを突き動かしているのかを知りたいと思った。そしてひと夏、女優たちと共に旅することになった。

この番組には何の仕掛けも技もない。ただ、朗読の旅を続ける女優たちに愚直にカメラを向け、撮ったものを愚直に編集した。面

白く見せようという工夫や、サービス精神が足りないかもしれない。でも、今回はそれでいいのだと思った。過剰な演出も説明も不要。なぜなら写っている現実がとてつもなくホンモノなのだから。

そんな番組が、放送人の会から評価して頂けた。思いがけないことだが、嬉しいことこの上ない。

コロナはもとより、様々な困難が立ち塞がる日々、入ってくる報せはうんざりするものばかり。しかし、そこに紛れて今回の朗報が飛び込んできた。

「ウソっ！」お恥すかしくも、第一声はそんな感じだ。足掻いていけば、こんな幸運が巡ってくることもあるのだ。今や、息の根が止められそうな零細企業にとって、カンフル剤になればと思う。

ありがとうございます。

◆優秀賞 3◆

「文化放送報道スペシャル 戦争はあった」のパーソナリティー・アーサー・ビナード氏と制作スタッフ

○表彰状

この番組では、アーサー・ビナードさんが、首都圏各地に隠れている「戦争の傷跡」を訪ね歩き、その謎を解き明かすようにレポートして行きます。単嶋プリズンや陸軍中野学校跡など、今は明るい場所ですが、権力者はそこで起こった忌まわしい事実について「光を当てて見えなくする」ように隠そうとします。しかし番組は「隠れたものを知ることこそ、戦争を反省すること」として、加害者側の視点を説き明かします。

謎解きのような演出による優れたドキュメ

ンタリーとして、ここに優秀賞を贈ります。

アーサー・ビナード氏（右）



〈表彰理由〉

アメリカ生まれの詩人・アーサー・ビナードさんが、首都圏各地に隠れている「戦争の傷跡」を訪ね歩き、それぞれの謎を解き明かすようにレポートしてゆく。単嶋プリズンや陸軍中野学校など、今はきれいな場所になっている。そこで起こった忌まわしい事実を、「光を当てて見えなくする」ように、権力者は都合の悪いことは隠そうとする。隠れたものを知ることこそ、「戦争を反省する」ことである。この特番には、被害者意識としての戦争ではなく、加害者側の視点で説き明かす意味あるドキュメンタリーである。

（講評担当・三原治）

【受賞者の言葉】

文化放送 報道スポーツセンター 部長 鈴木敏夫

この度は、大変栄誉な賞を頂くことになり、スタッフ一同驚くとともに喜んでおります。感謝申し上げます。

番組のルーツは5年前に遡ります。私ども文化放送は、戦後70年を迎えた2015年に、戦争の証言者たちの声を集める番組を制

作しようと企画。その際にパーソナリティを依頼したのが、アメリカ生まれの詩人であるアーサー・ビナード氏でした。



アーサー氏は2011年に「さがしています」という絵本を出版。広島原爆のために持ち主に寄り添うことができなかった弁当箱やワンピース、鼻眼鏡たちが主人への思いを語るというもので、その人肌感、手作り感にラジオの世界と相通じるものを感じ、番組出演をお願いしました。アーサー氏やスタッフはマイクを手に青森から沖縄、日系人が多く住むアメリカ・シカゴまで歩き回り、集めた証言者は47人。責任を取らない権力者、隠ぺいする軍部、そのしわ寄せで苦しみを強いられ、それでも生き抜いてゆく市民たち。戦後70年を過ぎても何ら変わらない社会の有り様に驚き、学ぶ良い機会でした。

その後、毎年、1本か2本のペースで主にアーサー氏を語り部にして「戦争」を振り返る番組を作り続けております。

全国に投下されたバンプキン爆弾の正体や、鈴木貫太郎総理の終戦の日の姿、米軍も知らなかった原爆投下部隊の実態、ガダルカナルの戦線で交わされた兵士同士の手紙など……少ない予算から削り出し、アーサー氏ひとりでガダルカナル島に取材に向かわせたこともありました。そのような中、昨年は、今までと違う切り口で番組を制作しようという

ことになりました。

日本において先の戦争は、被害者の経験を今に伝えることが重要である一方、加害者の立場に立つと、今度はイデオロギーの問題に転化されてしまう。しかしもつと違う振り返り方があるのではないかと考え「戦争に興味がなくとも聴きたくなる番組」を作ろうと。そのような中、小松左京氏の1974年発表の短編小説「戦争はなかった」を手に現れたのが、当のアーサー氏でした。同窓会に集まった仲間たちが誰も「あの戦争」のことを覚えていないというSFホラー。

アーサー氏はやや興奮気味に「この作品こそが今の日本を予見している」と熱く語り始めました。彼のこの一言をきっかけに、「我々もテレビの画面や紙面の中でしか戦争を見た事が無い。そこまで言うなら戦争は果たして本当にあったのか探してみようではないか」となったわけだ。

わが社の報道部は10人に満たない小所帯で24時間の放送業務をこなしていますが、数人の記者が手を挙げて、休日や就業後の時間を見つけては分担して取材を続けてくれました。それは東京裁判の残滓や、特攻隊員たちが里心を捨てた飛行場や、女子大学のキャンパスの中に残された軍都の中枢、文化放送に払い下げられた「隠ぺい放送局」、オタクの聖地に残されたスパイ養成機関といったものでした。都心のビル影、日常生活の死角にあつて誰も気づかない「あの戦争」を探するという作業は、ちょっとしたサスペンス映画の謎解きのようなものであり、BGMなど演出にもそれを反映させました。

当初は「ただの街歩きでは」と言う辛口の感想もありましたが「放送人の会」の皆様から「加害の歴史だけを取り上げた番組を初めて聴いた気がする」「自局の姿勢を批判して

いるのが良い」など前向きな意見を頂き強く感じました。小松左京氏のご遺族からも「素晴らしい」との感想を寄せて頂き、スタッフ一同安堵したことも良い思い出です。これからも細々とではありますが、小さな花を咲かせる仕事を続けてまいります。ありがとうございます。

◆企画賞◆ MBS「プレバト!!!」



○表彰状

この番組は、辛口査定で人気の俳人夏井いつき先生が、人気芸能人の俳句をバツパツと切って行き、視聴者を成程と思わせる添削で劇的に変えてみせる俳句コーナーをはじめ、水彩画や日本古来の文化・生け花などにも正面から取り組み、視聴者の知的好奇心を満足させる知的バラエティーの一品です。その卓越した企画力・演出力が、放送文化のさらなる可能性を発掘したことを高く評価

し、企画賞を贈ります。

〈表彰理由〉

辛口査定で人気を集めている講師役、夏井いつき先生の憎めないキャラクターを充分に活かしながら、梅沢富美男を始めとする人気芸能人が詠む俳句を、互いに競わせながら、視聴者になるほどと思わせるような、劇的に変わる添削など、視聴者の知的好奇心を満足させるバラエティー番組の一品である。

俳句をはじめ水彩画、生け花など、日本古来の文化を正面から取り組み、視聴者の支持を得た、その卓越した企画力、演出力は放送文化のさらなる多様性を開発したことを、高く評価したい。

(講師担当・新山賢治)

【受賞者の言葉】

MBS 東京制作局
水野雅之

今回の受賞に際し、夏井いつき先生からは、「この賞は、制作スタッフの知恵と努力の賜物。拍手を贈りたい」とのメッセージをいただきました。

「プレバト!!!」は、出演者の際立った個性が、よく評判になります。特に、夏井先生の見事な俳句の添削ショーと、臆することなく大御所芸能人をぶった斬る様は、番組の強烈な特徴です。夏井先生が個人的に表彰されたこともありますし、由緒ある俳句雑誌で、「プレバト!!!」の大型特集が組まれたことでもあります。そして「俳句番組」と言われたことも何度もあります。

でも「プレバト!!!」は、俳句番組ではありません。夏井先生の添削ショーだけではなく、梅沢富美男さんをはじめとする芸能人の熱のこもったやりとりも見所ですし、MCの浜田さんがそれを取り仕切るからこそ成立し



ている、絶妙にバランスが取れたバラエティ番組だという自負が、私たちにはあります。

実は、7年前、俳句の企画を立ち上げる時に、夏井先生とこんな会話が 있었습니다。「視聴率は、テレビの事情だから私には関係ない。俳句のためにならないと思ったら、番組には出ません。」「わかりました。でも、僕らは『俳句番組』を作るわけではありません。浜田さんのもと、バラエティ番組を作ります。」「それ以来、何度も主張をぶつけ合いましたし、お互いが譲れないものを背負いながら、番組を作り上げてきました。夏井先生の冒頭の言葉には、そんなところへの労いの思いが込められているんだと思います。

そして、番組が始まって8年というこの時期に、「プレバト!!!」が「企画賞」に選出されたことを、とても光栄に思います。水彩画や俳句などを査定する『才能ランキング』は、当初は文字どおり、生まれ持った才能の有無を、

たった一度の挑戦で査定することを狙って企画しました。でも、番組が続くうちに、梅沢さん、FUKAWAの藤本さん、KISHIMOTOの横尾さん、千賀さん……自身も気づいていなかった新たな才能を開花させる、番組独自のスターが、続々と生まれました。そんな皆さんに何度も番組に出演してほしいという思いから作ったルールが、特待生の昇格制度でした。企画立案時の「才能アリナシ」という定義からは外れてしまいましたが、番組に出演するたびに褒められたり、酷評されたりする、プレバト独自の「流動的な才能アリナシ」これが、番組が進化する原動力となりました。当初の企画意図に、大きな変化をもたらしてくださった芸能人の皆さんの本気の創作活動に、深く感謝します。

もうすぐ丸8年目を迎える「プレバト……」は、世間からはきつと、安定的な番組というイメージを持たれていると思います。でも、ゴールデンタイムで俳句を扱うことは、とても勇気が必要でしたし、企画を立ち上げた時から、私たちはずっと、他に類を見ないエッジの効いた番組を作り続けているという思いがありました。昨今、テレビ番組の様々な賞は、SNSで反響の大きい刺激的な番組に贈られることが増えましたが、そんな中で「プレバト……」を高く評価してくださった「放送人の会」の皆様は感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

◆特別賞◆

杉田成道

○表彰状

貴方はフジテレビの名作「北の国から」を長きにわたって演出しました。また日本映画放送社長としてもオリジナル時代劇の制作を

推進しました。本年はその20作目となる仲代達矢主演の「帰郷」を8Kで撮影し、まことに心を打つ作品として世に出されました。また、二〇〇三年から二〇一五年までは、長きにわたって日本映画テレビプロデューサー協会会長を務めました。

テレビからラジオ・映画にわたる貴方の老いることを知らない多彩な活動に敬意を表し、特別賞を贈ります。



〈表彰理由〉

倉本聰と組んだ「北の国から」シリーズや、「君は海を見たか」、「ライスカレー」などを作ってきた杉田さんは、日本映画放送社長としてオリジナル時代劇の制作を推進し、8Kで撮影した・仲代達矢主演の「帰郷」で20作を数える。

自ら監督を務めたのは「帰郷」で3作目に当たる。2018年には、ニッポン放送のラジオドラマ「ストリップバー物語」の演出に挑み、放送文化基金賞優秀賞に選ばれた。

また、2003年から2015年までの長きにわたって、日本映画テレビプロデューサー協会会長を務めた。

映画は「優駿 ORACION」、「最後の忠臣蔵」、「ジヨバンニの島」(原作・脚本)などを手がけた。杉田の多彩な活動は、この特別賞に値する。1943年生まれ76歳。

(講評担当・西村与志木)

【受賞者の言葉】

『北の国から』四十年に想う。

杉田 成道

「奇跡」という言葉がある。キリスト教では聖霊の降臨と結びついて言われるが、僕らにとってテレビドラマ『北の国から』は、(文字は違うが)まさに富良野岳の精霊が降りて来た「奇跡」であった。

見渡す限りの大自然の中で、人間はいかに小さな存在でしかないかということ、人間を動かすものは、人ではなく、ましてやちっぽけな自らの意思ですらなく、見えない高みから降りてくる精霊のような自然のエネルギーなのだという……。

僕らスタッフ、キャストは、その言葉(ことだま)とでも呼ぶべき精霊に驚嘆みにされて、二十二年の歳月をただだ『北の国から』一筋に人生を賭けてきた。それが終わって、十八年が経とうとしている。が、いまだに何処かのテレビで、五郎さんを、純君を、堂ちゃんを見かける。撮影が始まって、四十年である。この四十年間、黒板一家はいまだ視聴者の中で息づいている。そう思うと、静かな感動に身が包まれる。

1980年秋。僕が初めて富良野の地に立った時。全山黄金色の山々から、落葉が雨のように降り注ぎ、過巻き、一寸先が真っ黄色の世界となった。「これは……おとぎの国だ!」と、胸が震えたその時から、すべては始まった。

「大きな嘘はいつでも、小さな嘘はつくな!」。作家の倉本聰氏から、きつく厳命されて、まずは驚いた。ドラマはフィクションだから大本は嘘である。しかし、嘘を真実にするに

は、小さな嘘、すなわち細部が本当であって初めて真実に見える。どんなに小さな細部にもこだわれ!徹底的にリアルに表現せよ!その積み重ねがドラマを生きたものにする。

こつちも若く、対抗心もあるから、「よし、ならば徹底的にやってみよう!」と燃えた。その時、純は小学五年生、堂は四年生である。この二人を完膚なきまでにシゴいた。もともと都会の子供が、電気も水道もないような大自然の中に放り込まれる話である。真冬の川に放り込んだ。吹雪の中に何時間も立たせた。軽い凍傷で真っ赤になった顔は、演技どころではない、リアルそのものであった。「倉本、杉田、死ね、死ね、死ね!」と、純の台本の裏に書いてあった。

それが、やがて子供たちの成長を追う家族のドキュメントと、物語は変質していった。十年を経過して、純も堂も青春期を経過する頃になると、ドラマに何者かが忍び込んで来た。小さなリアルな積み重ねが、得体の知れない言葉のような霊を生み出していた。純も、堂も、五郎さんも、我々スタッフも、倉本さんさえ、『北の国から』の霊のようなものに突き動かされるように動いた。

五郎さんは「諦念」という生き方、「自然に対するように、すべてをあるがままに受け入れる」という生き方が、田中邦衛さんと一体となっていた。もう役を演じるということではなくなった。田中邦衛さんが、五郎の存在そのものとなった。

純も堂も、お隣の純ちゃん、堂ちゃんとなり、視聴者の中に息づいていった。毎回、二千万人に近い人が、食い入るように観てくれた。どの人も家族を持ち、子供を、親を、『北の国から』に重ねていった。

放送が終わると二千万に近い封書が来る。どれも番組の批評は書いてない。ただただ、そ

の人の人生が綴られている。父親が白骨死体で見つかった、その父の思い出。老人ホームで毎日死にたいと思っていたが、態座から落ちる水の一滴に命を感じたこと。『北の国から』を観て、明日も生きられると思ったこと。どこにも平凡な家族がなかった。

「ああ、この人たちは物語の向こうに、自分の人生を見つめている」、そう思った。不思議な感動であった。テレビを通して、まだ見ぬこの人たちと靈魂が繋がっている、そう感じた。富良野岳の精霊が、この人たちを呼び寄せた。大きな嘘が、二十二年の時間を通して、いつの間にか真実となった。まさに「奇跡」であった。

◆特別功労賞◆

堀川 とんこう



○表彰状

堀川さんはTBS入社以来、ドラマ制作一筋で、『岸辺のアルバム』『モモ子シリーズ』など数々の名作を世に問われ、その功績はテレ

ビドラマ史に深く刻まれています。また、放送人の会では、副会長および放送人グランプリ選考委員長として長年、制作者たちに熱いメッセージを送ってこられました。ご本名はアツタカさんですが「とんこうさん」と呼ばれて多くの会員に慕われました。

素晴らしい作品の数々を残された堀川さんを讃え、放送人の会に大きな貢献をされたことを謝し、ここに特別功労賞を贈ります。

＜表彰理由＞

堀川とんこうさんは「放送人の会」の副会長として、また当会の主催する「放送人グランプリ」の審査委員長として大きな功績を残されました。『放送作品としてどれだけの価値があるのか』という厳しくも優しい視線で評される姿は心に深く残っております。

1961年にTBSに入社し山田太一さん脚本の『岸辺のアルバム』、市川森一さん脚本、竹下景子さん主演の『モモ子シリーズ』など、数多くのテレビドラマを手掛けました。

松本清張原作「父系の指」でギャラクシー賞大賞、退職後に演出した東日本大震災をテーマにした「時は立ちどまらない」で文化庁芸術祭大賞、放送人グランプリを受賞。その続編でもある山田太一「ペンシヤルドラマ」「五年目のひとり」で放送人グランプリ特別賞を受賞しています。

素晴らしい作品群を残された堀川とんこうさんを称え、「放送人の会」に大きな貢献をされたことを謝し、ここに特別功労賞を送りたいと思います。

（講評担当…西村与志木）

【受賞者の言葉】

高木 凜

堀川は緩和病棟から最後の時を自宅で過ごすために退院してきたその日の深夜、旅立ちました。三月二十八日でした。コロナウィルス感染症緊急事態宣言が発せられたのは四月七日。病院ですぐに面会制限などが始まっていたのですが、もう少し頑張っていたらこんなにならなかつた時間があったのにと悔やまれてなりません。

果然としていた時に「放送人の会」の西村さん、菅野さんから堀川に「特別功労賞」を下さるというご連絡をいただきました。堀川の生前の功労に報いたいという趣旨の賞かどうかはわかりません。亡くなって戴ける賞ゆえなのでしょうか。不思議な感慨に包まれています。

私はまだ堀川が亡くなった暮らしたに慣れていないようです。ハンドルを握って、箱根峠を超え、国道一号を走り三島に降りたらあの病棟の奥の病室に私を待っている堀川がいる、そんな衝動が消えないのです。

この度のこと、堀川に何と伝えましょう。「皆さんが、ご褒美を下さるそうですよ」で宜しいでしょうか。堀川は恐らく、嬉しそうに相手をくずしながらも、「いやあ、それは申し訳ないなあ」と云うのではないかと思います。この数年、度々入退院を繰り返してまいりました。

役員会や催しものの案内を頂いても、参加することができなくなっております。

「東京がだんだん遠くなってきた」と日記にも記しています。会議に参加し、そのあとの皆様との懇談をとてもしみにしてまいりました。苦痛に耐え、やせ細ってゆき、何もすることが出来なくなりました。自らを見つめる不思議な時間の中で、皆様への申し訳なさと、寂しさに耐えておりました。

そんな堀川に東北新社さんから取材依頼がありました。アナザーストーリーという番組で、タイトルは『仮題 多摩川水害と岸辺のアルバム』でした。病み衰えて、言葉を発するのも苦しそうなお状態で如何なものかと思いましたが、山田太一さんも病床にあることを知り、病室のテラスで、カメラの前に立ちました。

三月九日、亡くなる二〇日前の姿です。こんな姿を晒してという批判もあるかもしれませんが、カメラの向こうの若いディレクターさんの問いに、いつものようにには応えきれませんでした。しかし懸命に言葉を手繰りながら語りました。放映日は未定ですが、堀川の旅立つ前の姿と言葉を、記憶いただければ嬉しく存じます。

最後になりましたが、皆様との長きに涉るご厚情、改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

◆第6回大山勝美賞◆

中込 卓也（なかめ たくや）

テレビ朝日総合編成局
ドラマ制作部プロデューサー

○表彰状

貴方は「やすらぎの郷」から「やすらぎの刻」道へと、準備期間を含めれば4年以上の長きにわたり、テレビ朝日の帯ドラマを見事にプロデュースされました。それは脚本家・倉本聰氏の厳しい注文に応え、名だたるベテランスター俳優たちの絶大な信頼を勝ち得た証です。

その労を多し、努力と才能を高く評価し、また今後のさらなる活躍を期待して、ここに大山勝美賞を贈ります。



《推薦理由》

「やすらぎへの郷」(2017)から「やすらぎの刻 道」(2019〜2020)へと、準備期間を含めれば4年以上、長きに亘る帯ドラマを見事に運営された氏の努力と才能を高く評価したい。脚本家・倉本聰氏とベテランのスター俳優たちの絶大な信頼を勝ちえた証である。氏の労を多としたい。

《略歴》

1964年生、横浜市出身。87年NTV映像センター入社。2001年テレビ朝日入社。

『小さな小さなあなたを産んで』(99年2月・日本テレビ、脚本…松原敏春)、『玩具の神様』(99年・NHKB、脚本…倉本聰、演出…石橋冠、制作統括…一柳邦久、西村与志木)。

以降、テレビ朝日で制作放送。『流転の王妃・最後の皇弟』(03年、脚本…龍居由佳里)、『菊次郎とさき』(第2・3シリーズ・05/07年、原作…北野武、脚本…興水泰弘ほか)、『雨と夢のあとに』(05年、原作…柳美里、脚本…成井豊ほか)、『未来講師めぐる』(08年、脚本…宮藤官九郎)、『ハガネの女』シリーズ(10年・11年、脚本…大石哲也)、『悪党〜重罪犯罪捜査班〜』(11年、脚本…深沢正樹)、『11人もいる!』(11年、脚本…宮藤官九郎)、『ダブルス〜二人の刑事』(13年、脚本…尾崎将也)、『やすらぎの郷』(17年)『やすらぎの刻 道』(19年)。

このたびは大変栄誉ある賞を頂きまして、選考して下さった大先輩方々にただただ感謝しております。(若手クリエイターに…)とありますが、私で大丈夫でしょうか?)

【受賞者の言葉】

『大山勝美』という名前は、私たちの世代には憧れの名前です。今から35年程前、大山先生は日大芸術学部で「ドラマ学」的授業を週に1コマ受け持っておられました。現役バリのTBSの大監督の授業ですから超人気教室に入りきらないほどの学生が集まっていたのですが、肝心の大山先生は多忙を理由に殆どいらっしやいません。代わりに当時先生が撮ったドラマをただひたすら見せられるという授業になり、気づくと生徒の数も減り…。

それから十数年が経ち、私もプロデューサーのはしくれとして何とか一本立ちした頃に、師匠である石橋冠監督と共に、TBSを退職された大山先生が設立したカズモに出向する形で、ドラマを創る機会が訪れました。そこで初めてきちんと自己紹介し「実は私、日芸で先生の授業…」まで言ったところで、大山先生は「それはごめんね、大変失礼しました」とおっしゃって、あの怖い顔を崩して笑ってくださいました。それが大山先生との思い出です。残念ながらが作品を一緒に作る機会には恵まれませんでした。が、業界の大先輩というだけでなく、そのような直接の関わりもあつたため尚更、私にとっては大きな「憧れ」を伴ったお名前です。

そんな方の名前を冠した賞を、私ごときがいただくなんて…これは大変なことになったなあ。過去の受賞者の燦爛たる経歴。私の散々たる経歴。そりゃ尻込みします。しかし、未来に向けて、これからの方がたの希望になれば、

と考え直しました。さしたるヒットドラマがなくても、多少の問題は起こしても(くれぐれも犯罪歴はごいません)、長くやっていければこんなご褒美を頂ける日もあるのだなあ、と。

そして、後日頂いた受賞理由に「倉本聰氏の厳しい注文を受け、さらに高齢の俳優たちのフォロー…云々」。最高です。なんだか老人介護の感謝状みたいですが、「やすらぎの郷」「やすらぎの刻 道」は老人の素晴らしさを描いた作品です。その作品のプロデューサーが老人世代の諸先輩方と向き合ったことが評価されるのであればまさに本望。これ以上のお褒めはないのではないかと。受賞理由を倉本先生にお伝えしました。「厳しい注文」を「困難やわがまま」に変えて伝えました。大笑いなさって「よし、じゃあ俺のおかげだから、賞金で奢れ」と。

「やすらぎ」シリーズは2015年の8月に準備を開始。今年の3月に放送を終えるまで、実に4年半を超える期間、この作品に専念していました。特に「刻」は放送1年。撮影期間は1年半でした。これだけ長い作品を仕上げたことも評価の対象とのことでした。ならば、これは胸を張って受賞しようと思えました。この先、1年を超える帯ドラマを創る機会に巡り合えるプロデューサーはそうは出てこないでしょうから(つまり、私を超える人間は物理的にそう簡単には出てこないであろう…)と。

「刻」の最終回には、関わったキャストスタッフ全員のお名前をクレジットさせていただきましたが、その数641名でした。そのすべての関係者を代表して、またこの番組を最後に鬼籍に入った方々への感謝と供養の思いを込めまして、ありがたく受賞させていただきます。

最後に、「やすらぎシリーズ」で共に戦った

弊社の服部宣之P、角川大映の山形亮介P、そして「郷」を担当してくれた河角直樹P(現東海テレビ)、そして藤田明二D、阿部雄一D、池添博D、唐木希浩Dにこの場をお借りして感謝いたします。本当にありがとうございます。

◆第6回大山勝美賞◆

藤村 忠寿(ふじむら ただひさ)

北海道テレビ放送コンテンツ事業局
クリエイティブフェロー

○表彰状

貴方は民放ローカル局のバラエティとしては異例のヒット番組「水曜どうでしょう?」のディレクターとしてそのお名前はつとに知られていましたが、近年はドラマも手がけ、「ミエルヒ」では数々の賞を受賞しています。また昨年演出した北海道テレビ開局50周年企画番組「チャンネルはそのまま!」は、そのテーマ、手法、エンターテインメント性が評価されました。

その才能と功績を高く評価し、ここに大山勝美賞を贈ります。

《推薦理由》

氏は既に、民放ローカル局のバラエティ番組として異例のヒットをした「水曜どうでしょう?」のディレクターとして名高いが、近年はドラマの演出も手がけ、「ミエルヒ」(2009年)ではギャラクシー賞優秀賞、放送文化基金賞を受賞している。昨年、氏が演出した北海道テレビ開局50周年企画番組「チャンネルはそのまま!」はそのテーマ、手法、エンターテインメント性が評価され、民放連賞テレビ部門グランプリ、テレビドラマ部門最優秀を受賞した。

氏の功績を高く評価したい。



(略歴)

1965年、愛知県生まれ。北海道大学法学部卒。90年4月、北海道テレビ放送入社。東京文芸編成業務部を経て、95年春、本社制作部に異動、『モザイクな夜V3』を担当。

96年10月『水曜どうでしょう』のチーフディレクターに就任。同番組の人気はローカル番組としては異例の全国放送・DVD全国発売・インターネット放送・番組本、写真集発売等、様々な事業に発展している。

10年4月、コンテンツ事業室へ異動。

〈主なテレビドラマ作品〉

『水曜どうでしょう プロジェクトドラマス ペシカル四国R14』(00年、演出。脚本…嬉野雅道、主演…首尾琢真)

H TV開局40周年記念テレビドラマ『歓喜の歌 第九が奏でる笑いと涙の人生模様』

(08年、演出。企画…重延浩・渡辺誠(テレビマンユニオン)、原作…立川志の輔、脚本…鄭義信、P…四宮康雅、嬉野雅道、制作協力…オフィスほたるい、テレビマンユニオン、主演…大泉洋)

H T B スペシャルドラマ『ミエルヒ』(09年、演出。企画…嬉野雅道、四宮康雅、脚本…青木豪、主演…安田顕、泉谷しげる。第47回ギャラクシー賞テレビ部門優秀賞、第36回放送文化基金賞番組部門テレビド

マ番組賞、第41回照明技術賞テレビドラマ・Vシネマ部門審査委員特別賞。)

H T B スペシャルドラマ『幸せハッピー』

(12年、演出。企画…嬉野雅道、脚本…青木豪、主演…渡辺えり、大谷亮介。2013 A B U 賞テレビドラマ部門入賞作品)

H T B 開局50周年記念テレビドラマ『チャ

ンネルはそのまま!』(19年、監督&出演。総監督…本広克行、監督…山本透、佐々木敦規、木村好克、原作…佐々木倫子、脚本…森

ハヤシ、主演…芳根京子、飯島寛騎。19年

日本民間放送連盟賞テレビ部門グランプリ受賞。)

【受賞者の言葉】

6月17日に刊行されるペリー萩野さんの『テレビの荒野を歩いた人たち』(新潮社)の帯文を書かせてもらいました。テレビ創成期に、まだ道と呼べるようなものがない、まさに荒野を歩いた先輩たちの、とても正直な証言集です。原稿をいただいて読みながら、涙が出そうになりました。うれし涙です。テレビの先輩たちは、いい加減で、一生懸命で、雑草だらけの荒野を漕ぐように歩き、走り、穴に落ち、すつ転び、そうやって進んできたんだと思うと、うれしくなりました。だからテレビは面白かったんだよね。そしてうらやましくもなりました。僕もそんな時代の荒野をすつ転びながら歩いてみたかったと。

先輩たちのおかげで荒野にはいくつもの道ができ、後に続いた多くのテレビマンたちがその道を辿り、道は歩きやすくなり、すつ転ぶことがなくなってきました。荒地は整地されて平坦になり、いつのまにか信号機までできて交通ルールも厳しくなり、わざわざ道を外

れて歩こうとするテレビマンはほとんどいなくなりました。

でも、先輩たちが歩いているいない荒野が、まだきつとどつかに広がっているはずです。いい加減に歩ける荒野がきつとまだある。特にローカル局にはそれがある。誰も探そうとしていないだけ、僕はそう思っています。

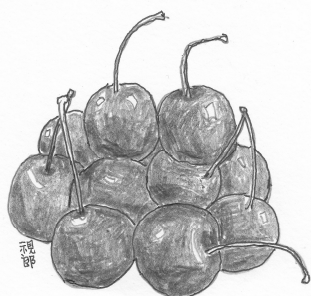
今回、テレビ創成期の荒野を歩いた先輩たちが作った「放送人の会」から、ローカル局のディレクターとして初の大山勝美賞をいただきました。とても光栄なことです。でもそれはきつと「おまえはローカルの荒野を求め、荒野をゆけ」という指示だと思っています。

4月初旬、世界中にウィルスが蔓延し始めたころ、「今はどうせ使わないだろう」と、会社から勝手にカメラ2台を持ち出して北海道の森の中に建つ小屋にひとりこもり、野鳥の撮影を始めました。文字通り雨のぬかるみにすつ転びながら撮影を続けて1ヶ月半。野鳥を至近距離で捉えられるようになりました。ディレクターですが、カメラの腕前もかなり上がりました、と勝手に悦に入っている今日この頃です。

サクラランボ

が事務局に届きました

た。会員の大類なききさんからのもので、今年には豊作で美味。事務局にいた一同でおいしくいただきました。



放送人グランプリ 2020 (第19回) 投票番組&人の一覧 (ジャンル別・放送順・敬称略)

~~テレビ~~

◆グランプリ

☆ドキュメンタリー

テレビ朝日「羽島慎一モーニングショー」制作スタッフ (毎・月～金、朝8:00～9:55、)

NHKBSプレミアム「アナザーストーリーズ 運命の分岐点」(毎火・夜9:00～、60分。2015年4月放送開始、全145回、)

百崎満晴 (ヒューマンドキュメンタリーのカメラマン、69年生まれ、93年NHK入局。「花のあとさき ムツバあさんの歩いた道」監督/撮影、

P:伊藤純)

日本電波ニュース社・谷津賢二カメラマンとアフガン取材のスタッフ

BS1 スペシャル「欲望の資本主義2019」NHKBS

『偽りの個人主義を越えて』（1/3、木曜21:00～、110分）、
『特別編 欲望の貨幣論2019』（7/14、日曜22:00～、110分）、
『日本・不確実性への挑戦』（20年1/3、金曜22:00～、110分）、
『欲望の時代の哲学2020 マルクス・ガブリエル NY思索ドキュメント』
(NHKEテレ、20年2/25～、毎火曜22:00～、25分×全4回)、

NHKスペシャル「全貌二・二六事件～最高機密文書で迫る～」(8/15、木曜19:30～、73分、)

NHKスペシャル「昭和天皇は何を語ったのか～初公開・秘録『拝謁記』～」(8/17、土曜21:00～、60分、出演：片岡幸太郎、橋爪功、語り：広瀬修子、取材：佐々木高晴、吉見直人、再現演出：佐古純一郎、D：小林亮夫、制作統括：塩田純、杉田陽介、梅原勇樹)
貴志謙介(10/13、NHKスペシャル「東京ブラックホールII 破壊と創造の1964年」の制作に対して)

BS1 スペシャル「証言ドキュメント 天安門事件30年」制作担当者 及びBS1 スペシャル担当編成主幹、(12/21、土曜夜8:00～、110分、制作担当：横井秀信CP、編成局編成主幹・千葉聡史)

ETV特集「日々、われらの日々～鉛筆画家 木下晋 妻を描く」(12/21、土曜23:00～、60分、D・撮影・編集：岩田弘史、制作統括：行成卓己、矢吹寿秀、制作：NED、制作著作：NHK、レノンズ)

NHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」(20年1/11、土曜21:00～、49分、D：加藤弘斗、神悟史、)

NHK逆転人生「美智子、86才 ゴールデン街の伝説のマリア」(20年3/9、月曜夜22:00～、50分、司会：山里亮太、杉浦友紀、ゲスト：佐々木美智子、出演：柴田理恵、語り：室井滋、)

☆ドラマ

「フジテレビヤングシナリオ大賞」

宮藤官九郎(脚本家、19年大河「いだてん～東京オリムピック噺～」ほか、多数の作品)

塚原あゆ子(演出家、最近作「グランメゾン東京」、斬新で繊細な演出でワクワクさせる。)

NHK・連続テレビ小説「スカーレット」脚本：水橋文美江、制作：内田ゆき、演出：中島由貴、主演：戸田恵梨香、(9/30～3/28、制作：NHK大阪、朝ドラ101作目)

東北放送テレビ開局60周年記念ドラマ「小さな神たちの祭り」(11/20、水曜夜8:00～9:54、脚本：内館牧子、D：松田礼人)

☆バラエティー

MBS「プレバト!!」(毎木曜、19:00～、60分。)

◆準グランプリ

☆ドキュメンタリー

「MeD(メディア表現とダイバーシティを抜本的に検討する会)」(メディアは女たちの声を届けているか?林香里、小島慶子、山本恵子、白川桃子、治部れんげ、李美淑、浜田敬子、竹下郁子、田中東子)

岡田晴恵(おかだ はるえ、白鷗大学教育学部教授。専門は感染免疫学、ワクチン学。)

NHKスペシャル「未解決事件 File.06 赤報隊事件」(全2回。1/27・夜7時30分、実録ドラマ73分、脚本：田子明弘、D：谷川功、P：中村直文ほか、美術：稲葉寿一、1/28・夜9時、ドキュメンタリー49分)

BS1 スペシャル「独占告白 渡辺恒雄 ～戦後政治はこうしてつくられた 昭和編」(20年3/7日、20:00～50分、21:00～50分、計100分・NHKBS、リポーター：大越健介、語り：加賀美幸子、D：安井浩一郎、制作統括：三村忠史、)

「NHK フジテレビ ヤフー共同企画「その時」メディアは何が出来るか」

東日本大震災9年関連特番『“死者ゼロ”を目指せ～デジタル新時代の情報発信とは～』(20年3/8、14:00～15:00、NHKG、出演：青木良樹、山下和彦、田中真司ほか、)

『わ・す・れ・な・い 死者をゼロにする情報とは』(3/11、5:50～16:50、フジテレビ)

☆ドラマ

テレビ朝日・東映「科捜研の女」シリーズ(1999年10月より、19年間で17シリーズ)

◆優秀賞・奨励賞など

☆ドキュメンタリー

玉川 徹(テレビ朝日コメンテーター、「そもそも総研」などの活躍。)

BS日テレ「小さな村の物語 イタリア」制作スタッフ(土曜夜18:00～、54分、構成：青木研次ほか、D：島崎亮太ほか、P：太平道春ほか、ナレ：三上博史、制作：テレコムスタッフ)

NHKG「ドキュメント72時間」(毎金曜、夜10:45～11時10分/15分、25～30分。2月末で360回。)

NHK「病院ラジオ」制作チーム(4/29、朝8:15～、45分『子ども病院編』、8/7、夜22:00～、50分『がん専門病院編』、20年2/11、火曜夜22:50～、40分『依存症治療病院編』)

ETV特集「忘れられた“ヒロシマ”～あの日を8万8千人が演じた～」NHK大阪

(8/10 土、23:00～、D：宮脇壮行、P：竹田かをり、制作統括：渡辺隆文、矢吹寿秀、)

BS1 スペシャル「隠された戦争協力～日本人と朝鮮戦争～」

(8/18 日、22:00～、50分+50分=100分、NHKBS、語り：本田豊子、再現パート演出：石川二郎、D：藤原和樹、制作統括：松本卓巨、鈴木達也)

BS1 スペシャル「パレエの王子になる！ “世界最高峰”ロシアパレエ学校の青春」NHKBS、

(9/7 土、22:00～、50分+50分、語り：原田美枝子、D：高橋泰一、制作統括：猪股修一、吉田宏徳、江南亮、制作：NHKグローバルメディアサービス、製作著作：NHK、日本電波ニュース)

ETV特集「辺野古 ～基地に翻弄された戦後～」(9/21 月、23:00～、60分)

BS1 スペシャル「証言ドキュメント・辺野古」(10/6 日、22:00～、50分+50分、NHK沖縄)

前編『こうして基地の街ができた』、後編『基地移設に翻弄された20年』

(語り：加賀美幸子、取材：二階堂はるか、D：奥秋聡、松本秀文、制作統括：小池幸太郎、車野真、)

NNNDキュメント19

「なかったことに、したかった。未成年の性被害①」「なかったことにできない。性被害②回復への道」

(10/6&13、日曜25:10～、30分、日本テレビ、D：植田恵子、撮影：門脇妙子、P：今村忠、福田靖雄、古希礼子、CP：有田康紀、)

「つぐない～BC級戦犯の遺言～」

(12/8、日曜夜1:05～、30分、福岡放送、D：五反田毬亜、P：伊崎健太郎、)

NHKG・目撃！につぼん

「“神の鳥”ライチョウ 天空の復活計画！」(10/20、日曜朝6:10～、35分、)

「激論の“トリエンナーレ”～作家と市民の75日～」(11/17、日曜朝6:10～、35分、制作：西山穂、制作著作：NHK大阪)

「ひとりを生きる 野村克也 84歳」(20年2/2、日曜朝6:10～、35分、D：高屋敷仁)

ETV特集「ある特攻隊員の死～祖母とたどる兄の最期～」(12/14、土曜夜23:00～、60分、D：福田紗由理、P：山口健一郎、梅原勇樹、制作著作：NHK大分)

阪神淡路大震災25年「うち 神戸母子寮が紡いだ家族の絆」

(20年1/19 日、24:55～25:50、読売テレビ、D：上馬場雄介、P：吉川秀和、CP：堀川雅子)

BS1 スペシャル「もう一つの37セカンズ～車椅子女子の挑戦～」

(20年2/2 日、22:00～、50分・NHKBS、取材：西尾完太、D：小山正秀、P：井科実、制作統括：土屋勝裕、松平保久、制作：NEP、制作協力：カイエン)

☆ドラマ

安達奈緒子 (脚本家、「きのう何食べた?」「サギデカ」「G線上のあなたと私」)

日本テレビ『水曜ドラマ』西憲彦CPチーム (オリジナルドラマの拘り)

よるドラ・「だから私は推しました」

(7/27 土、23:30～、30分×全8回、NHKG、脚本：森下佳子、D：保坂慶太、姜暎樹、渡邊良雄、P：高橋優香子、CP：三鬼一希、)

日本テレビ「同期のサクラ」

(10/19～12/18、水曜夜10:00～、60分×10話、脚本：遊川和彦、D：明石広人他、P：大平太ほか)

バリバラドラマ・「37セカンズ」(12/5 木、23:45～25:15、ドラマは74分、NHKBS)

(脚本・D：HIKARI、CP：土屋勝裕、プロデューサー：山口晋、HIKARI、)

ドラマ24・「コタキ兄弟と四苦八苦」テレビ東京

(20年1/14 金～、24:12～、40分×全12回、脚本：野木亜紀子、D：山下敦弘、P：濱谷晃一ほか、CP：阿部真士、制作：TV東京、AOI Pro、出演：古舘寛治 (兄)、滝藤賢一 (弟)、芳根京子)

◆企画・演出賞

フジテレビ「ルパンの娘」の演出・武内英樹 (7/11～、木曜夜22:00～、54分×11回、原作：横関大、脚本：徳永友一、P：稲葉直人、荒井俊雄、)

◆企画賞

日本テレビ「あなたの番です」

(4/14～9/18、55分×20話、原案・企画：秋元康、脚本：福原充則、D：佐久間紀佳他、P：池田健司)

◆特別賞

杉田成道 (「北の国から」はじめ、演出家、経営者として第一線で活躍。映画放送の団体に貢献)

吉岡秀隆 (俳優、「北の国から」はじめ、長年の活躍。映画「男はつらいよ50」の熱演を評価)

山田太一 (脚本家、日本を代表する脚本家。「沿線地図」「男たちの旅路」「岸辺のアルバム」ほか)

☆バラエティー

◆特別賞

伊藤隆行

(テレビ東京・プロデューサー、「モヤモヤさまぁ〜ず2」「池の水ぜんぶ抜く大作戦」「にちようチャップリン」「さますポ」「おしゃべりオジサンとヤバイ女」「やりすぎ都市伝説」など)

日比野和雄 (NHKプロデューサー、NHK大阪制作・Eテレ「バリバラ〜障害者情報バラエティー〜」)

〜ラジオ〜

◆グランプリ

☆ドキュメンタリー

J-WAVE「Generation to generation〜Stories of Okinawa」

(6/23、夜10:00〜、54分、出演：ジョン・カピラ、川平朝清)

「文化放送報道スペシャル 戦争はあった」アーサー・ビナード氏と制作スタッフ

(8/28、夜19:00〜、60分、)

荻上チキ (「荻上チキSession-22」9/22、夜22:00〜23:55、『荻上チキの香港取材報告』)

秀島文香 (ラジオパーソナリティ。ニッポン放送11/24、26:30〜、60分『文豪ROCK!〜眠らない読み聴かせ 宮沢賢治編』で第74回文化庁芸術祭賞「放送個人賞」受賞)

◆優秀賞・奨励賞など

武内陶子 (NHKアナウンサー、月〜金・12:30〜15:55・R1「武内陶子のごごラジ!」)

◆特別賞

湯川れいこ (音楽評論家、作詞家、DJパーソナリティ)

富澤一誠 (音楽評論家、プロデューサー、パーソナリティ、『J-POP』『Age Free Music』)

ジョン・カピラ (J-WAVE「Generation to generation〜Stories of Okinawa」)

2020年度放送人の会総会

2020年度の放送人の会の総会は「般社団法人放送人の会」第7期社員総会として開かれた。

開催日時 令和2年5月16日

午後1時〜2時

開催場所 東京都千代田区紀尾井町1・1

千代田放送会館

出席社員数

総社員数 236名 出席社員数 172名

内訳 本人出席 7名

委任状出席 165名

総社員の議決権数 236個

出席社員の議決権数 172個

議長 会長 今野勉

出席役員 会長 今野勉 副会長 前川英樹

理事 小川和之 理事 深尾隆一

理事 藤田京子 理事 吉田賢策 (6名)

監事 河野尚行 (1名)

(議事の経過の要領と結果)

議長は定刻に開会を宣し、本総会が新型コロナウイルスの感染拡大状況による「緊急事態条項」発出下に開催されることも想定し、社員(会員)の本人出席について慎重に判断し委任状の集約に努めた結果、右記のとおり定数に足る社員の出席があったので、本総会は適法に成立した旨を述べた。

(監査報告)

議案の審議に先立って監事 河野尚行から監査報告書記載のとおり第7期事業報告及び計算書類、並びに本総会で審議される事項に関して提出された報告書類は適法かつ正確であることを認める旨の報告があった。

(報告事項)

第7期事業報告の件

事務局より第7期(平成31年4月1日から令和2年3月31日まで)における、当法人の事業の状況につき詳細な報告があった。

(決議事項)

第1号議案 第7期計算書類承認の件

議長の指示に従い、事務局より令和2年3月31日現在の財産目録、貸借対照表、正味財産増減計算書並びに個別注記表について詳細に説明がなされた。

議長がその賛否を議場に諮ったところ、本議案は満場一致をもって原案どおり承認可決された。

第7期(2019年度)事業報告

1. 第19回 日韓中テレビ制作者フォーラム中国(興義)大会

「多彩で多元的なアジア文明の多様性」というテーマで、日本、韓国、中国の3国から5作品ずつ計15作品が上映され、それらの作品をもとに、テレビ制作者やメディア研究者が活発な意見交換を行った。一昨年、当会の総会で「2019年中国大会を以て放送人の会の参加は終了する」ことが承認されており、今回のフォーラムが、当会が主催団体として関わる最後の大会となった。今回は、2019年8月末に初めて開催地が決定し、9月初旬に準備会議、10月末に本会議開催という異例のこととなったが、参加会員の努力により、無事に最後の責務を果たすことができた。

2. 放送人グランプリ

第18回放送人グランプリ各賞および第5回大山勝美賞の贈賞

3. 名作の舞臺裏(放送番組センターと共催)

「花へんろ特別編 春子の人形 (NHK)」、29歳のクリスマス」(フジテレビ)

4. 人気番組メモリー (同)

「笑点」(日本テレビ)を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で延期した。

5. 放送人の世界(智大大学メディアジャーナル)と共催

「土井裕泰 (TBS) プロデューサー、ディレクター」を実施

6. 放送人の証言
加賀美幸子 小澤英輔 吉岡雅春 工藤英博 村上雅通 山田良明の各氏を実施

・放送100年記念『放送人の証言出版プロジェクト』の取り組みを進めた。
東京大学情報学環との共同企画を検討

討中。

7. ドキュメンタリーワールド・・・今期は実施せず。

8. ラジオプロジェクト

「ラジオ聞き(聞き) 酒の会」を発売に行うほか、交流会を開催

9. 情報交換・交流

会員の積極的交流を目的に新設。2月に初回の会合(単なる飲み会)を企画したが、新型コロナウイルスの影響で延期した。

10. 放送人句会

会員交流の場として継続開催。作品は会報に掲載している。

11. 広報

・会報 4 回発行(①総会/放送人グランプリ

座談会

・ホームページ アーカイブ機能を充実。タイムリーに更新し、活性化を図った。

・フェイスブック イベント企画の告知を中心に適宜アップしている。

12. 総務

会の活動全般を把握し、運営の円滑化に努めた。

一新したネット環境のもと、業務の効率的・効果的な推進、情報発信の強化を図った。

○会の活動は多岐に亘っている。今後も各活動への多くの会員の積極的な参加を期待する。

○会報および理事会議事録等に活動状況を詳しく掲載している。是非お読みいただきたい。

会費の振り込みをお願いします

例年、総会の後は「放送人グランプリ」の贈賞式、そして懇親パーティーでしたが、今年はその場がなく残念でした。例年その会場で多くの会員の方に年会費を納入していただいていたが、今年はその場がなかったため、会員全員に振り込み納入をお願いしています。既に振り込みのご案内と払込取扱票がお手元に届いているはずです。案内に従って振り込みをお願いします。郵便振り込みの用紙を送りましたが銀行振り込みもできます。

年会費は1万円です。「80歳以上、30歳未満は5千円」という規定はありますが、どうか応分の御寄附をお願いします。

放送人句会

4月、6月の放送人句会がコロナで休会。
次回放送人句会・8月も中止となりました。

○令和2年8月31日(金) 17時半頃から 投句締切18時半

○会場 赤坂・麦屋 星野先生が出席されます。先生の出席はこれが最後になります。

○兼題 パン(業界用語)。他の兼題はまだ決まっていません。いずれメールなどでお知らせします。
今回は、10月5日の予定です。

鶴橋康夫さんからの来信

「コロナの春だそこにある滑り台」
であります。

敬愛する皆さんにコロナ見舞いです。お元気でいて下さい。小生激太りながら台本作ります。とんこうさん、残念でした。

「友見舞う覚悟の笑みや木瓜の花」
でした。

またきつと元気で会いしましょう。

2019 年度実績・20 年度予算 収支対比

科目	2019 年度	2020 年度	増減
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
① 受取年会費	2,375,000	2,630,000	255,000
② 受取寄付金	148,000	158,000	10,000
受取寄付金振替額	3,768,280	4,842,183	1,073,903
③ 事業収入	2,680,000	2,680,000	
放送番組センター共同事業費	1,800,000	1,200,000	▽600,000
イベント収入	180,000	204,000	24,000
放送人の証言	700,000	700,000	0
④ 雑収益			
受取利息	17	15	▽2
経常収益計	8,971,297	9,734,198	762,901
(2) 経常費用			
① 事業費	3,637,948	4,245,720	607,772
名作の舞台裏	702,066	507,095	▽194,971
人気番組メモリー	296,240	0	▽296,240
放送人の世界	116,140	138,011	21,871
放送人の証言	521,298	766,741	245,443
放送人グランプリ	1,127,703	1,167,669	39,966
ラジオ・プロジェクト	50,000	50,000	0
放送人句会	103,233	100,233	▽3,000
日韓中フォーラム	721,268	1,515,971	794,703
② 一般管理費	4,921,078	5,135,749	214,671
給料手当	1,624,600	1,619,900	▽4,700
諸謝金	203,568	187,000	▽16,568
事務所賃貸料	863,100	871,092	7,992
通信費	338,161	327,710	▽10,451
旅費交通費	515,629	566,552	50,923
会議費	69,120	33,320	▽35,800
印刷費	209,666	216,558	6,892
広告宣伝費	481,567	340,753	▽140,814
消耗品費	128,557	441,208	312,651
交際費	35,000	30,000	▽5,000
支払手数料等	36,267	31,710	4,557
支払報酬	420,000	464,032	44,032
雑費	400	1,357	957
経常費用計	8,559,026	9,381,469	822,443
当期経常増減額	412,271	352,729	▽59,542

ラジオのページ

明けない夜はない

三原治

5月25日(月)、全国的に緊急事態宣言は解除された。とはいえ、まだ安心はできない。4月7日からの2カ月以上の外出自粛生活を余儀なくされている。

毎朝、通っていた田町もすでに2カ月以上、ご無沙汰だ。仕事は、SkypeとZOOMを使つてのリモートワーク。大学は、meetでオンライン授業。我が家のウサギ小屋生活は、ストレスが溜まる。テレビは新型コロナウイルス関連の番組が朝から夜まで流されて、気が滅入る。

その点、ラジオは癒される。コロナも取り上げるが、コロナ一色にはならない。音楽も流れ、パーソナリティーのテンポの良い話も楽しい。深夜放送全盛期からラジオは解放区になる性質がある。悩みや喜びのやりとりが繰り広げられる。今回のコロナでは、外出自粛で孤独な状態にあるリスナーたちのつながりの場となっている。一人じゃないんだ。ラジオを聴いていると、なぜか安心感が沸く。

テレビは、リモート放送に苦勞しているが、ラジオは昔から電話で充分だ。普段通りの放送である。

それでも、ラジオもコロナ禍に見舞われた。各ラジオ局ではスタジオ内の人教規制や、ブース屏の開放、別スタジオからの出演、中継コーナーの休止、会議アプリなどを駆使した「リモート放送」番組も増えた。スタジオでは、刑務所の面会室にあるアクリル板を挟んで向かい合つてしゃべるのが当たり前になった。

AMラジオにナイター中継もなく、道路交通情報でも自粛の影響が渋滞がほとんどなく

伝えるアナウンスも「順調です」ばかりだった。

コロナ禍のなか、ラジオを聴いていて気付いたことも多い。TBSラジオの「荻上チキ・Session 22」(月・金・22・00〜23・55)は、ギャラクシー大賞、ギャラクシーDJパーソナリティー賞を受賞する評価の高い番組である。改めて取り上げるほどのことでもないが…。

「日本の新しい民主主義のためのプラットフォーム」を掲げ、これまでにない角度から社会を切つていく姿勢が刺激的な番組。荻上チキは、ただ単に問題提起するだけの評論家ではない。ニュースを単に解説するのではなく、ニュースに対する様々な語り方を聞かせてくれる理知的な話術は魅力的で面白いトーンの声も印象的だ。番組では、SNSの積極的な活用や、ニュースで問題になっている政治家の発言、記者会見の内容を全文書き起こし、ホームページに掲載するなどの挑戦的な試みを実践している。番組中にもツイッターのつぶやきなどを参考にしながらトークを進めたり、ときにはツイッターで寄せられた質問を出演者に投げかけてみたりするのは、リスナーの探求心を満たすうえでとても効果的である。ラジオのニュース情報番組のキャスター・パーソナリティーとしての分野を開拓してくれた、その功績は大きい。

今回、外出自粛をうけ、自宅にてリモートワーク中、ノートパソコンの向こうには、テレビ画面がある。午前から午後にかけてのNHK総合では、国会中継が放送されている。環境ビデオの代わりに映像だけ流している。内容はどうするかというと、夜10時の「荻上チキ・Session 22」でフォローする。要点が整理され、その日の注目の場面が、音声で再生される。時には、専門家の解説も交えながら、チキ氏の感想が更に鋭い。

アベノマスクや10万円給付金、PCR検査、特効薬、ワクチンの行方などのコロナ関連の展開は言うに及ばず、「賭け麻雀で訓告を受けた黒川元検事長への処分をめぐり野党が追及責任の所在は？」5月26日(火)の放送は圧巻だった。なぜ黒川元検事長は懲戒処分にならなかったのか。その日の森法務大臣の国会での苦しい弁明をチキ氏が、見事に斬つてくれた。誰が一番愚かか。内閣であり、総理である。森友・加計両学園、桜を見る会、そして黒川問題。私たちは、何回馬鹿にされ続けているのだろうか。

コロナ危機は、放送界にも大きな変化を与えた。放送現場のスタッフの働き方も番組の作り方も変わらざるを得なくなった。この試練をどう乗り越えるのか。環境の変化にどう対応するのか。神様は越えられない試練は与えない。そして、「明けない夜はない」。この台詞がでてる「マクベス」をシェイクスピアは、ペストの時代に発表した。その精神は大切にしたい。(放送人の会理事・日大芸術学部放送学科非常勤講師)

URCレコード50年ぶりに復活

「杏が歌う『教訓1』」が話題に

田中 秋夫

♪命はひとつ 人生は一回だから 命を棄てないようにね 慌てるとつい フラフラと

新型コロナ騒動の最中にユーチューブで女優・杏が歌ったカバー曲「教訓1」が話題になった。「STAY HOME」を各言葉に自粛を強いられている人々に励ましのメッセージとして受けとめられた。

この歌は加川良が1971年7月にURC

レコードから発売した曲がオリジナルである。歌詞には「死んで神様と言われるよりも生きてバカだといわれましようよネ きれい」と並べられた時も、この命棄てないようにね」とあり、ユーモラスに厭戦のメッセージが込められている。

加川良は関西系フォークの拠点となっていたURCレコードの系列会社アート音楽出版の社員で、担当する高田渡の運転手兼マネージャーだった。当時まだ無名だった加川良が一躍ビッグアーティストの仲間入りを果たしたのは「70年安保」の1970年に岐阜県中津川で行われた野外コンサート「第2回中津川フォークジャンボリー」だった。全国から集まったフォーク好きの若者たちを前に飛び入りで出演し、「教訓1」を野太い声で歌い、満場の喝さいを浴びた。

1960年代の後半から70年代にかけて団塊世代の若者たちの間に大流行となったフォークソングは最初はアメリカのブラザー・ス・フォーやPPM、ピートシーガー、ボブ・ディラン等のモダン・フォークのコピーから始まったが、その後、若者たち自身による日本語のオリジナルフォークが続々誕生するようになった。その作品の傾向から東京圏の大学キャンパスを中心としたカレッジフォーク系と関西圏のメッセージフォーク系の2つの流派が存在した。カレッジフォークのアーチストには森山良子を筆頭にマイク真木、小室等のPPMフォロワーズ等が存在し、メジャーレコードからデビューしメディアで活躍していた。一方、関西系のURC(アングラ・レコード・クラブ)は1969年2月に設立された会員制のレコードクラブで、過激なメッセージが含まれる為にメジャーのレコード会社で発売禁止になった曲や放送局で放送禁止になりそうな楽曲を自主制作で発売していた。ア

ーチストには加川良の他に高石友也、岡林信康、フオーク・クルセダース、遠藤賢司、高田渡、五つの赤い風船、なぎら健壺、はつぴいえん、斎藤哲夫、等数多くの個性的なシンガー・ソングライターが所属していた。

その日本で最初のインディーズレーベルだったURCレコードが今年で発足50周年を迎えたという。それを記念してURCの音源から全21タイトルがポニーキャニオンから2020年の今年2月から3月にかけて順次発売された。そしてその発売を記念して5月10日にFM NACK5でアルフィーの坂崎幸之助による「URC 50周年・青春の遺産」と題して2時間の特別番組が放送された。ところで50年前のURCのアーチストたちの歌を令和時代の若者たちはどう受け止めるのだろうか。

フオーク全盛の時代の後にはバブル経済の時代が到来し、若者たちの間でダンスミュージックが流行った。「アゲアゲ」のノリでリズムだけが強調され、歌詞には意味が無く、リズムに乗りやすい英語が頻繁に使われていた。

しかし、バブル崩壊後には再び若者たちの音楽にフオーク系のデューオ「ゆず」、「いきものがかり」等の作品に見られるように歌詞が戻ってきている。そして、現在、注目の安倍政権による黒川検事長の定年延長問題に対してツイッターで小泉今日子をはじめ多くの作家やミュージシャン等、さまざまな分野の著名人が「#検察庁法改正に反対します」と意志表明し、700万ツイートを集めたと言われている。「いきものがかり」の水野良樹も「政党支持や政策以前の問題で根本のルールを揺るがしかねないアクションだと思う」とツイートしている。その世論のうねりが検察OBの反対行動を後押しし、政府が検察庁法改正を断念した。SNSを使った若者たちの声が政治

を変えたのだ。

これからの時代を考えると新型コロナ騒動の終息後にはこれまで経験したことのない厳しい時代の到来が予想されている。そのように考えると若者たちが築いたあのURC・メッセーじフオーク時代の再来も夢では無いのかもしれない。(放送人の会理事)

再放送とラジオ、

「久米宏ラジオなんですけど」を聴いて

木原 毅

民放ラジオ番組の再放送はドラマや放送各賞の受賞作以外、あまりないものだが、これもコロナの影響が時宜を得た企画があった。

5月2日と9日の2週にわたって『久米宏ラジオなんですけど』(土曜午後1時〜3時)のゲスト枠が、まるまる再放送されたのだ。2日が自ら『8割おじさん』を名乗る北大の西浦博教授、9日が政府の新型コロナウイルス感染症専門家会議の尾身茂副座長、まさに上半期のキーパーソンとなった2人である。

西浦さんは前年2019年3月の、尾身さんは同8月の出演分だった。この2人を呼び込んだのは偶然か、はたまた番組の慧眼か(まさか)。それはさておき久米宏の変らぬインタビュー手腕もあってそれぞれ聴きごたえのある30分だった。――西浦さんとはもともとは電気工学畑出身、高専でロボットコンテストなどの出場を目指していたが阪神淡路大震災で考え方が変わったこと、いっぽう全共闘世代の尾身さんは慶應の法学部に進んだものの悶々としていたところに自治医科大開学の報を聞き僻地医療の道に進んだことなど、人となりから医療に対する基本的な姿勢、そして感染症についての考え方まで生放送(当時)ながらよくまとまっていたように思う。

話しぶりから推察するにこの人たちは、コロナ対策の記者会見では仕方なく政治家屋さんと同席したものの言いたいことがきちんと伝わらず、それで西浦さんは敢えて最悪のシナリオを披露するに至ったんだろうな、そんなふうに思えた。西浦さんがポリオウイルス対策から学んだという『数理モデル』、これが理解できただけでも聴いた価値があった。(いまでもこれらの音源はラジオクラウドからたり着くことができるはず)

この評判がよかったせいか同番組では5月23日にもスペシャル版として「あのゲストが語った日本社会とメディア」と題して森達也、池澤夏樹、太田愛の3回分の対談をまとめて再放送。さらに30日には「五輪がくる! アンコール」として、ことし年初の特集を再編集したものに特別ゲストの高橋源一郎さんとの対談を交えて放送。最後の一人になっても東京五輪に反対! という姿勢を洒脱に語るとともに、日本人が震災後の福島から目をそらすようにしている状況を改めて示した。

エッセイスト山口文憲に『やってよかった東京五輪』(新潮文庫)という新刊がある。1964年当時の新聞記事などをベースに当時の日本の姿を活写したものだ、そのなかに外国人観光客相手に募金を乞う傷痍軍人の姿に恥ずかしさを覚えるという投書欄が採取されている。五輪熱が高まるなかで敗戦の爪痕を見たくないという風潮が官民間問わず広がっていたのは想像に難くない。これにモノ申さずにはいられないと大島渚が作ったのが『忘れられた皇軍』(NTV「ノンフィクション劇場」1963年8月放送。久米宏のラジオの再放送を聴きながらこの名作も1年に1回は再放送、さもなくばぜひhuluのラインナップに加えてほしいと強く思った。(6月6日付追記:「久米宏ラジオなんですけど」

ど」は6月一杯で終わることが発表された)

(放送人の会・監事)

「村上RADIOホームステイ
スペシャル」の反響、人々への共
感と励ましを伝えるラジオ

延江 浩

「3密」「クラスター」「自粛警察」「東京アラート」……新型コロナウィルスをめぐって新しい言葉が続々と生まれ、ただでさえ閉塞感漂う日々に、ざわつく気持ちになるのは私一人ではないだろう。受け手の心を追い込むような語感も気がかりだ。言葉をなりたいとする私たちは、そうしたことを敏感に意識しながら、日々の仕事をどう進めるべきだろうか。

ラジオに関して言えば、パーソナリティは自宅からの出演が主になって、スタジオでの手の込んだ仕掛けはかなわなくなり、話すべき意味を吟味して放送に臨むシンプルなスタイルに戻っている。番組尺が1時間としたら、実のない、漫然とした、ダラダラ喋るだけの番組は消え、与えられた1時間をどう構成するか、それこそエッセンシャルワーカーや医療従事者が聴いていてくれるかもしれないと思いながら、

リスナーと1対1の付き合いを考える、そんな番組が増えていく。それに応えるかのように、在宅率の高まりでリスナー層が拡大し、これまでなかったサラリーマンからのメッセーじも増え、聴取率もじわじわ上がっている。

そんな中、『村上RADIO』でお付き合いのある村上春樹さんからメールがあったのは緊急事態宣言延長発表直後だった。「こんなことできないかな?」――大変な状況に置かれてい

るリスナーも少なくないと思う。元気を出してもらいたい、みんなで無事に生き延びよう。そんな村上春樹さんの思いを実現したいと企画されたのが、『村上RADIOステイホームスペシャル』明るいあしたを迎えるための音楽』だった。

「今日は僕の自宅の書斎から。会いたい人にも会えない、行きたいところにも行けない、やりたいこともやれない、そういう皆さんのために、少しでも元気の出る、心が和む音楽を選んでみました。うまく元気が出るかどうかあまり自信はありませんけど、がんばってみます」

膨大なレコードコレクションから選り出されたプレイリストと、リスナーに語りかけられたコロナの時代を生き抜く知恵と希望への道筋。分かりやすく丁寧を選び抜かれた言葉だと思った。

「コロナとの戦いは戦争のようなものだという言い方をする政治家がいます。でも僕はそういうたとえは正しくないと思う。ウィルスとの戦いは、善と悪、敵と味方の対立じゃなくて、僕らがどれだけ知恵を絞って、協力し合い、助け合い、それぞれをうまく保っていかれるかという試練の場です。殺し合うための力の戦いではなく、生かし合うための知恵の戦いです。敵意や憎しみはそこでは不要なものです。簡単に戦争にはたとえてほしくない。そうですよね？」

約2時間の『村上RADIO』特別編でオンエアされた言葉を、国内外の多くのメディアが取り上げ、フランス「リベラシオン」は全世界アクセスランキングで第2位の反響数となった。

放送後、TOKYO FMの番組審議会ではこんな意見が相次いだ。

「日常を淡々と送っている春樹さんがいて、

(コロナ状況下で) 孤独なリスナーが一方にいて、その連帯感をイメージした」

「細い回路で繋がっている、現代社会とか都会的というか、それが今求められているラジオの原点」

「マスク、ワクチン、そして『愛』」。

「これは村上春樹さんだから言えること」

「語りが精緻、優しく、切ない、聴き込まれた楽曲。ストーリーから少しずれていく感覚。一滴一滴垂らしていくようなエピソード。聴いていて気持ちが安らぐ」……。

番組のラストは、ウェイウェイ・ウーがバート・バカラックのメロディを二胡で奏でた「世界は愛を求めている」だった。夜の静寂の中で、村上春樹さんはリスナーにこう語りかけた。

「平和な日常が一日も早く、世界に戻ることを祈っています。いまお酒を飲んでいるかた、いらつしやいますか。きつといらつしやるでしょうね。明るくあしたのために乾杯しましょう。おやすみなさい」

午後11時55分、番組は終わり、緊急事態宣言解除を伝えるその日最後のニュースが流れた。けつして声高ではなく、人々への共感と励ましを、音楽と言葉とユーモアで伝えることの大切さを『村上RADIO』は再認識させてくれた。

ラジオはやっぱり素敵だと、しみじみ思う。

(TFMエグゼクティブプランナー)

ラジオドラマ「おもちゃの三味線」

制作スタッフ時代の思い出

永田俊和

新型コロナウイルス騒動のため、テレビは連続ドラマが制作中断するなど放送素材に苦

労している。バラエティもドラマも未公開シーン入り再編集版や傑作選等、単なる再放送にならぬような工夫をこらしている。中でも過去の異色素材を「発掘」した番組がNHKとテレビ東京で注目された。NHKは5月16日の「天然素材NHK」。300万件というアーカイブスから、取って置きの映像素材を一挙お蔵出しに。封印された隆霊実験や熊と人間の奇妙な生活、ハイレベル過ぎるヨガ教室等まさに抱腹もの。

テレビ東京は5月19日から4週にわたる特番「浦和から持ってきて」で、自局の過去の「ヤバイ番組」を、「オールナイトニッポン」パーソナリティもつとめる佐久間寛行ら名の名物プロデューサーが紹介した。門外不出の番組テープ倉庫「浦和アーカイブセンター」に秘蔵の「珍番組」の数々と紹介コメントはテレ東ならではの好評だった。

ラジオの場合はスタジオでの「密接」を避けたリ、リモート出演等の工夫はしつつもテレビほど放送素材に苦勞することはなさそうだが、もしアーカイブから再放送の機会があれば、私がもう一度聴いてみたいのは何といってもラジオドラマ「おもちゃの三味線」だ。

この番組は1990年(平成2年)6月18日に「ニッポン放送スーパーステーション」枠で放送された。

原作はエッセイスト関谷子さんの短編集「おもちゃの三味線 白鵬・勘三郎・芥川比呂志」(文藝春秋刊)から「初代白鵬のこと」の部分でドラマ仕立てにしたもの。

関さんは「日本の驚く堀口大学聞き書き」で日本エッセイスト・クラブ賞、「芸づくし忠臣蔵」で芸術選奨文部大臣賞、読売文学賞を受賞しているまさに「芸談聞き書き」の名医。当時は「オールナイトニッポン」の名物プロ

デューサー中川公夫さんと親しく、同番組スベシャルパーソナリティに岩城宏之氏、桂米朝師らを紹介いただいている。演出はラジオドラマで芸術祭賞、放送文化基金賞、民放祭賞等数々の受賞歴に輝く神山雄吉さん。

主演は初代白鵬夫人藤間正子さん役に、当時アイドルだった宮沢りえさん。白鵬役は、その孫にあたる十代目松本幸四郎(当時七代目市川染五郎)。染五郎さんはまた17歳の高校生で、宮沢りえさんと同じ年だった。またナレーターは二代目中村又五郎さんに登場いただいた。又五郎さんは池波正太郎「剣客商売」の主人公・秋山小兵衛のモデルとして知られる端正な脇役俳優だったが、正子夫人の父・初代中村吉右衛門の薫陶を受け、もう一人の主役白鵬とも親交があっただけに、まさに適役と言えよう。

物語は心暖まる初代白鵬夫妻の愛情物語だ。正子さんが、まだおもちゃの三味線を買ってもらったような幼い頃から、厳しい父親(初代吉右衛門)の目を盗むようにして、13歳年上の白鵬との愛を育んでいったさまを描いている。

私はこの時、制作部副部長でプロデューサーだったが、ラジオドラマ初挑戦の染五郎さんの相手役(宮沢りえさん)の代役として本読みしたり、特別出演していただいた二代目吉右衛門さんのご自宅に収録に邪魔するなど、得難い経験をさせてもらった。歌舞伎大好き人間となった現在の私が、当時にタイムスリップしていたら、どんなに興奮していたらと思う。(放送人の会・理事)

追悼

含羞の人 堀川とんこうさん

田澤正稔

入社2年目の昭和42年、「七人の刑事」のADとして、「ダンパカー」「花咲く故郷」「愛のように」と続けざまに堀川さんのADを務めた。

「七人の刑事」に七人のディレクター。蟻川茂男Pのもと、山田和也、須子信仁、柴田馨、鴨下信一、今野勉、日向宏之、そして堀川敦厚。日向、堀川両Dは鈴木淳生、坂崎彰、井下靖央とともに「花の36年組」と呼ばれ、2期上の今野、高橋一郎、並木章、吉川正澄、実相寺昭雄ら「dA」世代に続いてTBSドラマを支える中堅、若手として輿望を担っていた。堀川さんは江利チエミ主演の30分ドラマ「サザエさん」の合間を縫っての掛け持ちだったか、終了後だったか。

ADはふたり。佐藤度一とぼく。単発1時間ドラマを毎週収録、撮っちゃ出し。本番が終わればアルバイトのFDたちが台本しつちやぶいて紙吹雪よろしく灯の落ちたCスタ狭しとまき散らし、朝まで飲み明かしていたものだった。上記の面々も半ば物故された。

閑話休題。高品格の「花咲く故郷」と月丘千秋の「愛のように」。

方や土の匂い、方や都会の香り。

堀川さんのドラマ群に通底する二つの志向性が既にそれぞれの作品のタイトルからも想起される。

ボサボサの髪にジャンパー姿で美女を傍らに濃緑色のマスタングを駆っていた堀川さん。群馬県中之条で生まれ育ち、県立高崎高校から東大に進み、小説家を目指していた堀川さん。

「サザエさん」「みかんきんかん夏みかん」「茜さんのお弁当」などのホームドラマから、「モモコ」シリーズを挟んで、「袋」や「ステイルライフ」までの作品群の幅。含羞の人であって、デリカシーに無頓着。

自己探求心旺盛にして世事に疎く、「ずっとドラマをつくり」続けた堀川さん。

酒を嗜まなかったせいか、仕事以外のプライベートをこじ絡したことは多くない。数少ないそうした折にも内側をのぞかせることは別してなかった。

にもかかわらず、不思議なことに、堀川さんとの時間は、外形だけ、ほとんど覚えていない。仕事上の会話、パーティでの立ち話、ゴルフでのおしゃべり。頼まれごと。ここですっかり引き写すことができる。

気になる人だった。切り抜かれた眼の奥に深い闇を抱えている人だった。その闇には土の匂いと都会の香りが立ち籠めていた。

「モモコ」で「ステイルライフ」を買った、という意味のことを自身、語っていた。

確かに、「ステイルライフ」企画が実現することは普通考えられない。編成、ドラマ部長、役員待遇といった社歴も与ったかもしれないし、「モモコ」パワーが後押ししたことは確かだろう。だが本当のところは文学青年の青い炎、作家としての執念が然かしめ

た、と考えるのが至当だろう。奇蹟とも言うべき「ステイルライフ」一篇とともに、堀川さん自身、テレビドラマ史の謎として語り継がれることになるかどうか。

あるいは、泉下で呟いているかもしれない。私を深く埋めてと。

合掌

サヨナラ とんこうさん

前川英樹

どうしてそういう話になったのかは忘れた

堀川さんが演出から編成への人事異動の内示を受けた時のことだという。「局長室でね、不覚にも涙がこぼれてさ、ぼたっと机に落ちたんだよ……」ということ或少しはにかみながら話してくれたことがあった。思えば幹部社員コースのためのキャリアパスといつていいであろう人事なのだ。ああ、この人は根っからのドラマ人なんだと思ったのだった。

記憶は遡る。

1968年のあの「日開争が終わった時だ。組合の中闘(中央闘争委員会)のメンバーだった堀川さんは。組合の運動論とは違うくテレビの問題提起をどう総括するかという役回りだった。組合文書として書かれた堀川レポートは、誠実にして苦渋に満ちた一章だった。テレビ論と組合の方針の相反する関係をなんとか取りまとめようとした「堀川の誠実さ」に、多くの人が同情し共感したのだった。

私が制作現場を離れて四半世紀、再び堀川さんと出会ったのは「放送人の会」だった。なんの因果か法人化のためのプロジェクトを担当することになってアレコレと試行錯誤しつつ作業している様を見て、何を思ったのか「前川ちゃんはまだエネルギーがあるねえ、ぼくの年になるとリビドーが枯渇してきてさ」と言われたことがある。リビドー！久々に聞いた一言だ。そういつつも、堀川さんは「放送人グランプリ」の選考委員長を長い間務め、制作者たちに向けて熱いメッセージを送り続けた。それは、ドラマでもドキュメンタリーでもバラエティーでも変わらなかった。そこには堀川さんの決意のようなものが静かにしかし揺るがずに込められていたと思う。贈賞式の

スピーチの一言ずつが全てホリカワトンコウだった。「堀川さんのあの訥々とした語り口が良いんですよ」というと「僕は流麗に話してるつもりなんだけどなあ」というのがまた堀川さんらしくて凄く良かった。

放送人の会の副会長として会全体に心配りをするので、多くの会員に慕われていた。細かな気遣いがさり気なく伝わってきた。

若い時から「敦厚(アツタカ)という本名をみんなが読めず、「敦煌のトンだろう、厚の音読みはコウだ」ということで「とんこう」さんと呼ばれていたが、それを職業名にしてしまったのもよかった。なんで「とんこう」なのか覚えてる人も少なくなっただけ、それはそれでいい。

堀川さんが長年心を込めて多くの人たちに贈った「放送人グランプリ」を、堀川さんに贈ることになった。放送人の会全員の気持ちが届められている。

でもね、賞を贈るよりも少し付き合って欲しかったな。そう思う。

私の数少ないドラマ制作の中で、堀川さんと共同演出をした番組に「グッドバイママ」がある。佳作だと思う。その記憶と想いを込めて、グッドバイとんこうさん。

訃報 大原れいこ(本名大養麗子)

2020年4月27日、膠芽腫で死去。享年84。63年TBS入社。71年テレビマンユニオンへ、設立の1年後に参加。以後「オーケストラがやって来た」「五嶋龍のオデッセイ」などを多数手がけた。長野冬季オリンピック開会式の「第Ⅱ―衛星生中継の海外統括プロデューサー。コンサートの企画制作も多数。祖父は大原美術館を設立した太原孫三郎。夫は大養毅の孫で共同通信社長の故大養康彦。名門の一族である。

松尾羊一のめざし

「界限」を失う東京

今に始まったことではないが東京育ちは故郷という言葉に実感が持てない。ある世代以上の東京人がしきりに口にしていたのが埃っぽい地べたに連なる狭い町並みだ。それは故郷より狭い「界限」への想いだろうか。

故人を含めれば例えば永六輔の下谷や浅草、なざら健老の木挽町（今は東銀座）、愛川欽也の巣鴨、小沢昭一の蒲田など……。なかでも仕出し屋「弁菊」の倅で以前、都知事だった男も「呉服問屋が軒をつらねる中に、御影石の碎片をふきつけたモルタル作りの二階建て、上も下も窓ばかりがこけおどかしの角店で、下が調理場、一階が住まい……」と自宅から界限を眺めていた（青島幸男「人間万事塞翁が丙午より」）。

かれらは年少のある時期から戦後を「亡びゆく昭和」への予感をにじませて界限で育った日々を描いている。

その背後に関東大震災を経て東京大空襲で失った家屋敷を、界限にこもる戦後日本の胎内感としてとらえていたのが永井荷風だった。「大や猫が垣の破れや塀の隙間を見出して自然と其の種族ばかりに限られた通路を作る」と同じように、表通りに門戸を張ることの出来ぬ平民は大道と大道との間に自ら彼らの棲息に適当した路地を作ったのだ（「日和下駄」より）。

路地と路地の猥雑な風景が人間の「けもの道」であり、それらが交差した地域が「界限」であった。表通りにひしめき合う大店と違い、吹きだまりの界限に生活観をもつ人々が東京人の原型だった。

一家だんらんや向こう三軒両隣の「マイライフ」的密室の多幸感とのあつれき、対立をテ

ーマに等身大のテレビドラマを生んできた。地方と都市の変容に連れ、社会や家族構造、生き方や暮らし方も大きく変わった。故郷喪失の孤独感、それが東京人の界限単位での共同体だとして克明に見つめ、映しとってきたのがテレビ映像であった。

人は何のために生きるのか、「書き割り人生」のような一夜の表現に見る喜怒哀楽を界限のことばで易しく、重く描くロマンの存在を信じた。

これはテレビ的映画である……いや、映画のテレビが。

映画評

これはテレビ的映画である……いや、映画のテレビが。

映画「三島由紀夫VS東大全共闘50年目の真実」

前川英樹

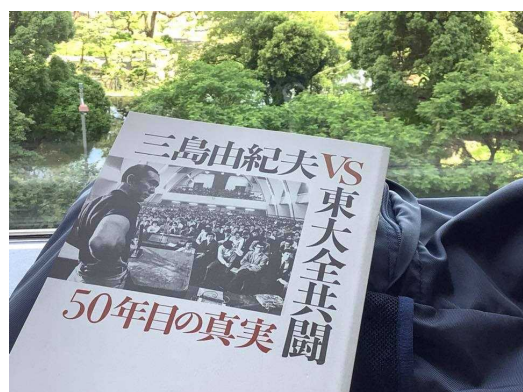
公開されたので早く見ようと思っていたら、コロナ禍で映画館が閉鎖されてしまった。先日、ようやく見に行った。

圧倒的に面白かった。

その理由は、何よりも私が、ほぼ同時代人だからである。私は、60年安保闘争の年に大学に入學し、1964年にTBS入社。1968年のTBS闘争の中にいた。スクリーンに映し出された最初のカットから時代の空気が吹き寄せてくるのを感じた。終わるまで、現在と切断されていない過去を見つめ続けていた。

もうひとつは、生身の三島の魅力である。言葉も立ち居振る舞いも。

三島作品はほとんどいいって良いだろう、読んでいない。読みたいと思わない。惹かれるものがない。しかし、「などですめらぎは人間（ひと）となりたまいし」の一言を



知った時、それはやはり衝撃的だった。もちろん私は天皇主義者ではない。しかし、日本の近代を考えるとときに外せない何かがある。映像として記録されている三島の姿は、実に生き生きとして魅力的であった。

全共闘は、日本の左翼運動として初めて「身体」的ということ提起したと思う。映画では、そのことが知性との関係で語られている。討論はほとんどそれに終始しているといってもいい。

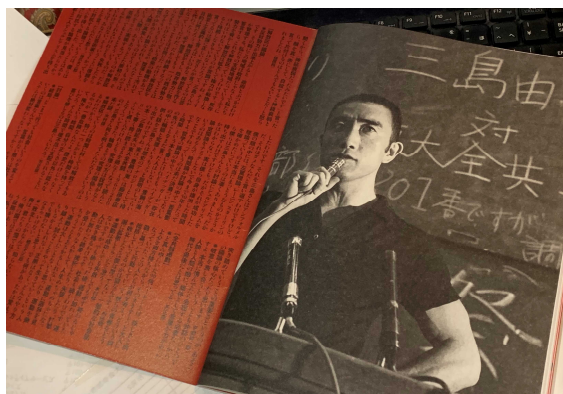
全共闘運動は二つのピーク（頂）を持つ。一つは東大であり、もう一つは日大である。（もう一つ「京大バルチザン」を挙げる人もいるだろうが、それについて私は詳しくは知らない。）

東大全共闘の圧倒的な知力・観念性・抽象性と身体性（反知性）がブレンドされないまま混沌と提示されているのがよく分る。そこが面白い。その意味で、三島と全共闘は既に共闘関係にあった。天皇や情熱の問題ではない。

三島のあるいはこの議論が残した「言霊」は

いまも漂っている。全共闘OBたちはその言霊を背負っている。この映画を見終わって、私たちもそれを背負わされている。

芥正彦の存在感は凄い。現在もおそれを保持している。目力（メチカラ）に感心した。あの日あので語られた「解放区」は空間としてではなく時間として存在するべきだ」という一言は、至言である。そして、今なお「二つしかない時間をもってくるやつが一番危険なんだよ。歴史だけじゃなくて、権力という時間。自分の正しさ以外に認めないだろ。」と芥正彦は言う。



・この映画は、映画として製作され映画館で上映されているが、極めてテレビ的である。

・記録媒体はフィルムだが、むしろ中継というべきだ。

・当時の技術的条件では、中継車と大型カメラを持ち込み、ケーブルを敷設するのは物理的に難しい。取材交渉としても現実的ではなかっただろう。

・テーマに沿って大きく編集されていて、また当事者・関係者のインタビューや状況映像は

挿入されているが、表現手法としてのモニタージュはない。

・討論の時間と空間をそのまま提示しようとしている。

・テレビ局の映像素材のアーカイブ価値が見直されて良い。

だから、これはすぐれてテレビの仕事である。このことを極めて高く評価する。

『「時間」をすべて自ら政治的に再編したあとで、それを「歴史」として呈示する権利を有するのが「権力」だとすれば、そのものの「現在」が（を…引用者）、as it is（あるがまま）に呈示しようとするテレビの存在は、権力にとって許しがたいだろう。『テレビ、お前はただの現在にすぎない。お前は安定性を欠き、公平を欠き、真実を欠く』——それが体制の警告だ。テレビが随落するのは、安定、公平などを自ら求めるときだ。

「時間」をすべて自ら選択し内面化したあとで、それを「作品」として呈示することを「芸術」とするならば、時間を追うことによつてのみ、独自の表現をもたらそうとするテレビは、芸術の第二義の本質を欠いている。非選択的、非永遠的、非作品的……etc. それは、いわゆる「芸術」からみれば、『テレビ、お前はただの現在にすぎない』となるだろう。』

「お前はただの現在にすぎない テレビに何が可能か」(秋元晴彦 村木良彦 今野勉 田畑書店 1969)より。

「三島由紀夫VS東大全闘 50年目の真実」がテレビ的だ、という所以である。

8月3日の放送人旬会は、

コロナ過により、中止となりました！

会員名簿

2020.6.16 現在

【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石田研一 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 伊藤博文 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 【え】 江川雄一 江口展之 遠藤利男 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大沢悠里 太田昌宏 大類なぎさ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 小河原正巳 沖野暲 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 川淵恵子 河邑厚徳 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美 香 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木原毅 木村成忠 【く】 工藤英博 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤邦勝 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 下村幸子 白井博 新山賢治 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木芳夫 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 竹中一夫 田澤正稔 多田健 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中典子 田中則広 田原茂行 【ち】 千葉邦彦 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【と】 東城祐司 戸田桂太 外崎宏司 富沢一誠 豊原隆太郎 鳥谷規 【な】 長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清美 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村芙美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】 沼田通嗣 【の】 延江浩 信井文夫 【は】 萩原豊 林健嗣 林宣昭 林安二 原田令嗣 【ひ】 日笠昭彦 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 古川重樹 【へ】 逸見京子 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑑一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 元田成 諸橋毅一 【や】 八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記

▼受賞者の皆さま、お忙しい中、ご寄稿ありがとうございます。ごさいいます。お会いできる日を楽しみにしております。▼コロナ禍のHP告知。始まりは2月27日、人気番組メモリー「笑点」を中止する。▼3月13日、どきどき紛れで「改正・新型インフルエンザ等対策特別措置法」が成立し、NHKは指定公共機関に指定され（2条6項、「新型インフルエンザ対策を実施する」と規定（3条5項）もされて、総理に報告する義務がある、となった。某氏が言う、「NHKは本物の政府広報テレビ局となった」と。▼3月27日、『句会』の中止を告知。▼パンデミック、クラスター、ソーシャルディスタンス。聞き慣れぬ片仮名が飛び交い、「不要不急の「自粛要請」、同調圧力がかかる。▼4月11日、事務局の閉鎖を告知。▼そして緊急事態宣言が解除。「新しい生活様式」「新しい日常」なる怪しげな標語が出現、いつか来た道状態へ（?）。▼ドラマの収録は三密の極致。4月期連ドラはポロポロになり、観客席でかくも切ない思いをするのだから、現場の放送人はさぞかしと思う。思うが、その中で「愛の不時着」全16話を一気見して堪能。韓国は未だ戦時体制の国だった。台湾も然り。だとすれば戦時体制はコロナに強いと言ったことか…。（た）▼松尾羊一さんは今号に寄稿していただきましたが、外出は自粛ではなく、できない。鈴木典之さんは脊柱管狭窄で歩行困難。伊藤も腰痛で500メートル歩くのがやっと。編集担当の老人3人はこの3ヶ月事務局へ全く顔を見せず、放送人の会が遠くになっていました。頼りになるのは菅野さんで、今号の大部分をまとめていただきました。今野会長が巻頭言で言っている世代交代は会報編集部では進んでいます。伊藤の編集作業はコロナと関係なく何年来のテレワークで、これが腰に悪い（現）